

鳥取市円護寺

円 護 寺 遺 跡 群

中ノ郷団地(円護寺地区)開発に
伴う埋蔵文化財発掘調査

1983

財団法人 鳥取県教育文化財団

序 文

鳥取市街を一望のもとに見おろし、市民の憩の場となっている久松山、その北麓に位置する円護寺地区は、緑の山々に囲まれ、喧騒から離れた閑静な出園地帯となっている。歴史的にも、豊臣秀吉によって自刃に追いこまれた悲運の名将吉川経家の墓地が円護寺部落の奥にあり、鳥取城攻めにまつわる伝説も数多く残されている。

この豊かな環境の地に、鳥取県住宅供給公社によって住宅団地（円護寺団地）が開発されることとなり、事前の発掘調査を（財）鳥取県教育文化財団が同公社の委託により行ってきた。調査の結果、今回新たに発見された数基を含めた古墳群、秀吉による鳥取城攻めの際に築かれた砦跡等、数多くの遺構の実態が明らかになり、古代史・中近世史に新たな資料を加えた。今後、これらの資料が図幡・鳥取県の歴史の解明の一助となれば幸いである。

末尾ながら、この調査に全面的に協力していただいた、地元円護寺部落をはじめ、関係の各位に対して深く感謝の意を申し上げる次第であります。

昭和58年3月

財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 平林鴻三

例　　言

1. 本報告書は、鳥取県住宅供給公社による円護寺団地開発に先だつ円護寺遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 「円護寺遺跡群」の呼称は、本調査の実施に判って便宜的に使用しているもので、円護寺古墳群（4・19～29号墳・横穴）、砦跡・土塁3ヵ所、狭義の円護寺遺跡、近世の建物跡等の、円護寺団地開発地内の遺跡を包括した名称である。
3. 本遺跡は、鳥取市円護寺字庵ノ城・古屋敷・上ノ平ル・中尾・北谷山に所在する。
4. 発掘調査は、財團法人鳥取県教育文化財団が鳥取県住宅供給公社から委託をうけて、1982年4月1日から、同年8月12日まで行い、整理作業は1983年2月5日まで行った。
5. 調査は、鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに、坂本敬司・長岡充展・松下利秀が行った。また測量については、鳥取県住宅供給公社から野口理主幹・坂口博技師の協力を得た。
6. 本書の執筆並びに編集は、坂本・長岡・松下の討議にもとづいて行った。
7. 遺物の実測及びトレースは、坂本・長岡・松下と千金摩樹江・小林美奈が行った。
8. 円護寺21号墳出土の人骨及び同23号墳出土の赤色顔料について、鳥取大学医学部法医学教室（教授岡田吉郎・助教授井上晃孝・助手池淵淳）に鑑定していただき、本書に鑑定書を掲載した。銘記して感謝いたします。
9. 調査に際し、円護寺・江津・浜坂・服部の方々をはじめ、多方面からの参加・援助を得た。銘記して感謝いたします。

調査関係者一覧

事務局	松下陽吉	鳥取県住宅供給公社事務局長
	前川嘉夫	同　　総務課長
	石黒直美	同　　主事
	平木安市	財團法人鳥取県教育文化財団常務理事
	田中幸治郎	同　　次長
調査指導		鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター
調査員	坂本敬司	鳥取県教育文化財団
	長岡充展	同
	松下利秀	(1982年4月19日より)
調査協力	野口　理	鳥取県住宅供給公社主幹
	坂口　博	同　　技師

目 次

序 文	
例 言・関係者一覧	
目 次	
挿図・図版目次	
第1章 位置と環境	1
第2章 調査経過	5
第3章 古墳群	6
円護寺4・20号墳	6
タ 19号墳	11
タ 21号墳	18
タ 22・26号墳	24
タ 23・24・25号墳	30
タ 27号墳	40
タ 28・29号墳	52
タ 橫穴	56
第4章 石跡	58
庵ノ城石跡	58
古屋敷石跡	66
中尾土壘	75
第5章 建物跡・テラス地形	77
古屋敷第1テラス	77
古屋敷第5テラス	82
円護寺遺跡(散布地)	83
古寺地区	84
第6章 円護寺21号墳出土人骨・23号墳出土顔料の鑑定	85
鳥取大学医学部法医学教室 教授 岡田吉郎	
助教授 井上晃孝	
助 手 池淵 淳	
第7章 ま と め	96

挿図・図版目次

挿図目次

第1図	周辺遺跡地図	1	第32図	円護寺23号墳第5埋葬施設実測図	38			
第2図	円護寺遺跡群調査箇所配置図	3・4	第33図	〃	第6埋葬施設実測図	39		
第3図	円護寺4・20号墳現況実測図	6	第34図	円護寺27号墳現況実測図	41			
第4図	円護寺4号墳遺構図	7	第35図	〃	造構図	42		
第5図	〃	埋葬施設造構図①	8	第36図	〃	埋葬施設上部石積 出土状況	43	
第6図	〃	〃	②	第37図	円護寺27号墳埋葬施設追構図	44		
第7図	〃	出土遺物実測図	10	第38図	〃	〃	展開図	45・46
第8図	円護寺19号墳現況実測図	11	第39図	〃	〃	出土遺物 その1	47	
第9図	〃	移転石棺実測図	12	第40図	円護寺27号墳埋葬施設出土遺物 その2	48		
第10図	〃	遺構図	13・14	第41図	円護寺27号墳埋葬施設出土遺物 その3	48		
第11図	〃	第1埋葬施設実測図	15	第42図	円護寺27号墳埋葬施設出土遺物 その4	49・50		
第12図	〃	第2埋葬施設実測図	16	第43図	円護寺27号墳埋葬施設出土遺物 その5	51		
第13図	〃	遺物実測図	17	第44図	円護寺29号墳出土遺物実測図	52		
第14図	円護寺21号墳現況実測図	18	第45図	円護寺28号墳遺構図	53・54			
第15図	〃	遺構図	19	第46図	円護寺29号墳遺構図	55		
第16図	〃	埋葬施設蓋石実測図	20	第47図	円護寺横穴実測図	56		
第17図	〃	〃	展開図	21	第48図	堀ノ城砦跡現況実測図	59	
第18図	〃	出土遺物実測図①	22	第49図	〃	遺構図・トレンチ配置図	60	
第19図	〃	〃	②	第50図	〃	トレンチ配置図	61	
第20図	円護寺22号墳遺物実測図	24	第51図	〃	構全体図	63		
第21図	円護寺22・26号墳現況実測図	25・26	第52図	〃	出土遺物実測図	64・65		
第22図	〃	遺構図	27・28	第53図	古屋敷跡現況実測図	67・68		
第23図	〃	第1埋葬施設	29	第54図	〃	遺構図	69・70	
第24図	円護寺23・24・25号墳現況実測図	30	第55図	〃	トレンチ断面図	71		
第25図	〃	遺構図	31・32	第56図	〃	構全体図	72	
第26図	円護寺23号墳第1埋葬施設蓋石 実測図	33	第57図	妙見塚石室実測図	73			
第27図	円護寺23号墳第1埋葬施設展開図	34	第58図	古屋敷出土古銭拓本	73			
第28図	円護寺23・25号墳遺物実測図	35						
第29図	円護寺23号墳第2埋葬施設実測図	36						
第30図	〃	第3埋葬施設実測図	37					
第31図	〃	第4埋葬施設実測図	37					

第59図	中尾上塁遺構図	76	第66図	古尾敷第1テラス石列遺構図	81
第60図	・ 横断図	76	第67図	古尾敷第5テラストレンチ図	82
第61図	古尾敷第1テラス遺構配置図	78	第68図	・ 石列遺構図	82
第62図	・ 磐石図	79	第69図	・ 遺物実測図	82
第63図	・ 井戸遺構図	79	第70図	円護寺遺跡トレンチ図	83
第64図	・ 集石遺構図	80	第71図	古寺地区トレンチ図	84
第65図	・ 土埴遺構図	81	第72図	周辺古墳分布図	96

図版目次

図版1	円護寺遺跡群全景	図版21	円護寺27号墳
図版2	円護寺4号墳	図版22	・
図版3	・	図版23	・
図版4	・	図版24	・
図版5	円護寺19号墳	図版25	・
図版6	・	図版26	・
図版7	・	図版27	・
図版8	円護寺21号墳	図版28	円護寺28・29号墳
図版9	・	図版29	・ 横穴
図版10	・	図版30	「旧墨さく覧」絵図
図版11	・	図版31	・
図版12	・	図版32	庵ノ城跡
図版13	円護寺22号墳	図版33	・
図版14	円護寺23・24・25号墳	図版34	古尾敷跡
図版15	・	図版35	・
図版16	・	図版36	・
図版17	・	図版37	古尾敷第1テラス
図版18	・	図版38	・
図版19	円護寺27号墳	図版39	・ 同第5テラス
図版20	・	図版40	円護寺遺跡(散布地)・古寺地区

第1章 位置と環境

円護寺遺跡群は、鳥取平野を縦断する千代川の右岸、鳥取市円護寺にあり、久松山を隔てて鳥取市街地の北に位置する。久松山には、戦国期に因幡守護山名氏の城が築かれて以来、一時羽柴秀吉による鳥取城攻めを受け陥落したが、江戸時代に入り鳥取池田家の居城が置かれ、現在の鳥取県庁に至るまで、鳥取地方の政治・文化の中心となっており、鳥取城跡は、太閤ヶ平とあわせ史跡となっている。久松山から北西に丸山へ続く尾根と、その北の摩尼山・本陣山から続く尾根にはさまれた谷合に円護寺部落はある。円護寺部落から千代川まで約3km、そして千代川右岸の海岸には広大な鳥取砂丘がひろがる。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡としては、千代川右岸の栗谷遺跡（前期～後期）、直浪遺跡（中期～後期）、追後遺跡（中期）栃木山遺跡（中期）、千代川左岸湖山池周辺

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 1. 円護寺遺跡群 | 2. 湖山山頂群 | 3. 間地若古墳群 |
| 4. 桃葉谷横穴群 | 5. 堂寺古墳群 | 6. 深金山1号墳 |
| 7. 水坂横穴群 | 8. 穴神山横穴群 | 9. 深金山2号墳 |
| 10. 深金山古墳群 | 11. 東町1号横穴 | 12. 東町2号横穴 |
| 13. 大船塚1・2号墳 | 14. 二浦1・2号墳 | 15. 湖山1・2号墳 |
| 16. 星山古墳群 | 17. 石筋古墳 | 18. 天神山城跡 |
| 19. 北尾山城跡 | 20. 吉山城跡 | 21. ヒル山谷跡 |
| 22. 丸山城跡 | 23. 深金山城跡 | 24. 鳥取城跡 |



第1図 周辺遺跡地図

の、青島・桂見・布勢・大柄の各遺跡（いずれも後期）がある。特徴的なことは、千代川右岸は、縄文時代中期を中心とする砂丘遺跡が多く、千代川左岸は縄文時代後期を中心とする低湿地遺跡であることである。

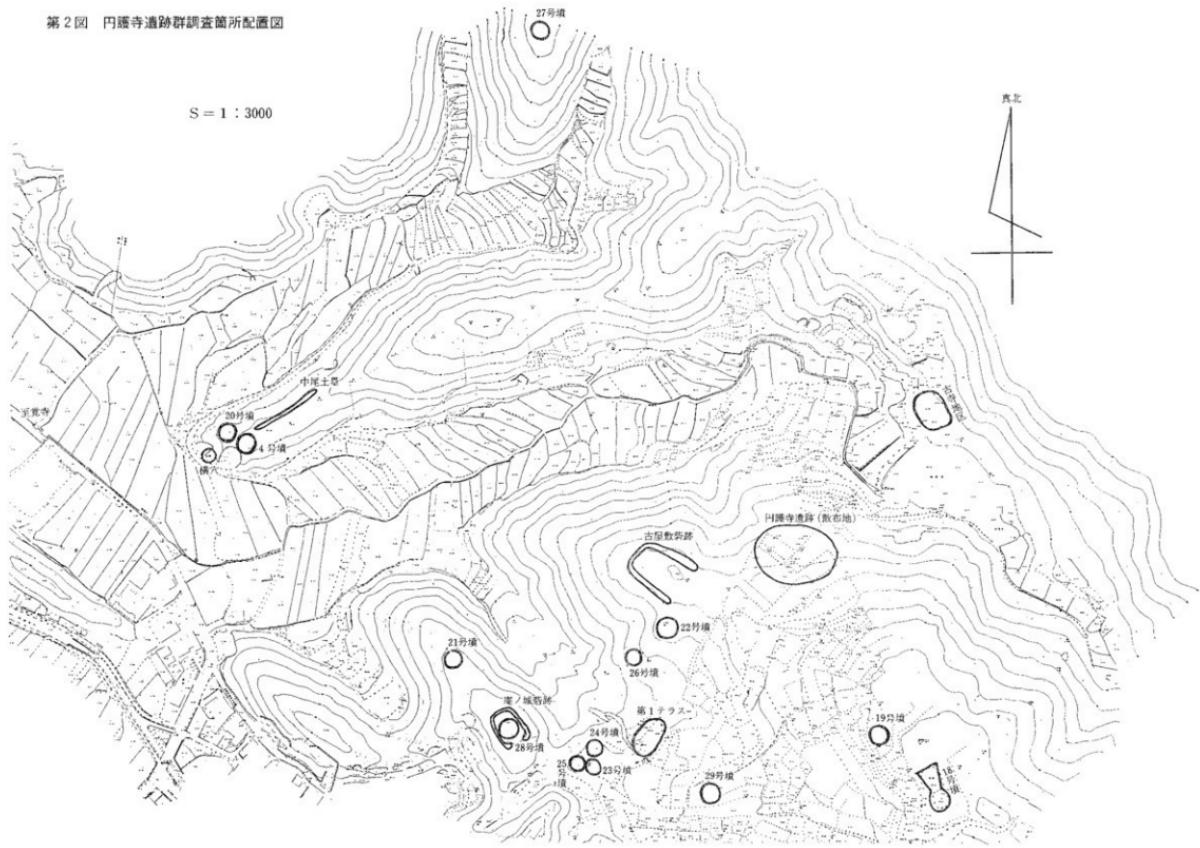
弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡数はふえるものの、発掘調査例は少なく、集落跡としては、千代川左岸の布勢第2遺跡、湖山第2遺跡等、祭祀遺跡に秋里遺跡がある。しかし、古墳の造営は鳥取平野全域にみられ、生活空間の拡大が推定できる。鳥取平野全体を見ると、鳥取市南部の古郡家1号墳(90m)を中心とする美和古墳群、湖山池周辺の楕円1号墳(92m)、布勢古墳(59m)、大熊段1号墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)等の大前方後円墳があり、古墳時代の因幡における大勢力がこの二つの地に居住していたと推定される。円護寺遺跡群の位置する千代川右岸の河口付近では、上にあげたような大古墳はほとんどみられない。荒神山横穴群・浜坂横穴群・雁金山横穴・雁金山古墳群・東町1・2号横穴・湯山古墳群・開地谷古墳群・桃栗谷横穴群・党寺古墳群は、いずれも古墳時代後期の群集墳と考えられる。そして、この地域は横穴が非常に多いことが注目される。このことは、千代川右岸が一つの政治的まとまりを形成していたことを推察させる。この地は、海部の居住していた場所と考えられており、円護寺遺跡の古墳群も、千代川右岸の古墳群の中に位置づけられるであろう。

奈良時代以後で注目されることは、摩尼山の存在である。摩尼山は、平安時代すでに因幡における大台宗の拠点となっていたが、円護寺部落内にある円護寺の持つ『円護寺縁起』の中には、その起源説話に摩尼山との深い関係が記されている。円護寺の谷は、摩尼山の影響のもとで、密教的な空間の中に位置づけられていたと思われる。

そのような宗教的空间としての円護寺は、中世末に鳥取城が久松山に築かれたことにより、一時政治的な場となる。1581（天正9）年の秀吉による鳥取城攻めの際、秀吉は、鳥取城の東方太閣ヶ平に陣を設き、鳥取城を包囲した。円護寺は、北側の包囲網の一つとして、堀屋播磨守等の陣が置かれ、また現在円護寺トンネルのある道祖神坂は、宮部継潤によつて攻撃され、鳥取城と支城雁金城の連絡を絶たれ、鳥取城は孤立した。当時の遺構は、鳥取城側としては、雁金城跡・丸山城跡があり、秀吉側としては、太閣ヶ平に残る本陣跡をはじめ、今回調査した円護寺の砦跡・浜坂のヒル山砦跡・道城山砦跡他、多数の土壘がある。これらの砦跡は、江戸時代岡島正義によって書かれた『旧墨さく覽』に詳しい。

近世の円護寺村は、付近でとれる軟質で良好な石材に恵まれ、隣の党寺村と共に、石材の産地として知られる。その石は「円護寺石」「党寺石」と呼ばれ、現在でも石を切りだした跡が何カ所か残っている。しかし、近代に入り、セメントの普及等のため、「円護寺石」の需要は減り、現在ではかつての面影はなく、静かな田園地帯となっている。

第2図 円溝寺遺跡群調査箇所配置図



第2章 調査の経過

鳥取市円護寺は、鳥取県教育委員会による遺跡分布調査によって、数基の古墳群と散布地及び土塁の存在が確認されていた。この地に、鳥取県住宅供給公社により「円護寺団地」開発の計画がたてられ、計画地区内の埋蔵文化財の発掘調査の必要が生じた。当初計画地内には、古墳3基・横穴1基・散布地1カ所、土塁3カ所が知られていた。鳥取県住宅供給公社は、文化財担当部局と協議した結果、鳥取県教育文化財団が委託を受け、1982年4月1日から同年7月31日まで発掘調査を行うこととなった。

その結果、当初考えられていた古墳のうち1基（円護寺20号墳）は古墳ではなく、横穴（円護寺横穴）も石切り用に作られたものであることがわかった。また散布地（円護寺遺跡）もトレンチによる試掘調査の結果、遺物・遺構はみられず、遺跡ではないと判断した。その反面、遺跡の有無を確認する試掘調査では、新たに古墳8基（うち円護寺26号墳は結構古墳でないと判断した）を確認し、また近世のものと思われる屋敷跡を確認した。さらに、住宅供給公社の計画変更に伴い、古墳1基（円護寺27号墳）が計画地区内に入り、計9基の古墳の調査が追加されることとなった。

そのため、4月19日より調査員1人を増員し、3人の調査員で調査を行った。調査は1982年8月12日まで発掘作業を行い、整理作業は翌1983年2月5日まで行った。

調査した箇所・面積は以下の通りである。

古墳 12基（うち2基は古墳でなかった）

横穴 1基（横穴ではなかった）

散布地 140m²（トレンチ4本）

土塁 3カ所（約1000m²）

屋敷跡等 約1000m²

古墳確認トレンチ 約100m²

第3章 古墳群

円護寺4号墳

円護寺4号墳は、字中尾と呼ばれる尾根の先端部に位置している、径約9.1mの円墳であるが、墳丘上部は削平され、墳丘北側も一部削半されていた。周溝は検出されなかつた。墳丘断面から観察すると、最下層の赤茶褐色の岩層が地山と考えられ、その上に盛土をして墳丘を造ったものと考えられる。墳丘西側は平坦な地形となっており、盛土は薄く、傾斜の大きい東側では厚くなっている。また、墳丘東側では、地山の岩層と同質の石が列石状に観察されたが、これは埋葬施設をつくる際に掘り下げられた岩層の破片を盛土の一部として使用したものと考えられる。

埋葬施設

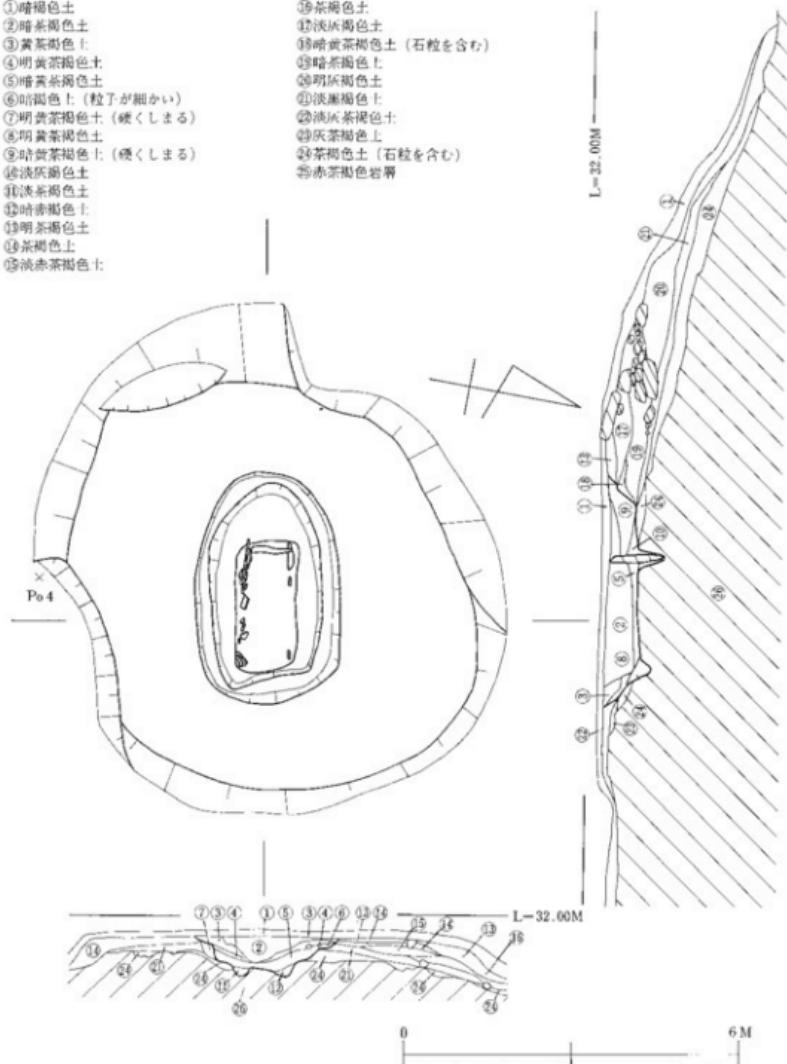
発掘にあたって、現表土の茶褐色土をとりさった段階で、暗茶褐色土の落ち込みが確認された。落ち込みの輪郭が不整形であることから、掘り方とは考えられず、盗掘跡と考えられる。その南西隅で、須恵器蓋環(Po1、2)を検出しているが、Po1内には鉄鏃3本(F5~7)、鉄鏃の柄の部分(F8~11)、刀子(F



第3図 円護寺4・20号墳現況実測図、20号墳断面図

12) 刀子の破片 2 本 (F 13,14) がまとめて入れられていた。同層内では、他に蓋環身 (Po 3), 高環脚片 (Po 5), 鉄錠 (F 2.3.4) を検出している。暗茶褐色土をとりさると、

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ①暗褐色土 | ⑩茶褐色土 |
| ②暗茶褐色土 | ⑪淡灰褐色土 |
| ③黃茶褐色土 | ⑫暗灰茶褐色土 (石粒を含む) |
| ④明黃茶褐色土 | ⑬暗茶褐色土 |
| ⑤暗黃茶褐色土 | ⑭明灰褐色土 |
| ⑥暗褐色土 (粒子が細かい) | ⑮淡灰褐色土 |
| ⑦明黃茶褐色土 (硬くしまる) | ⑯灰茶褐色土 |
| ⑧明黃茶褐色土 | ⑰茶褐色土 (石粒を含む) |
| ⑨暗黃茶褐色土 (硬くしまる) | ⑱赤茶褐色岩層 |
| ⑩淡灰褐色土 | |
| ⑪暗茶褐色土 | |
| ⑫明茶褐色土 | |
| ⑬茶褐色土 | |
| ⑭淡赤茶褐色土 | |



第4図 円護寺4号墳遺構図

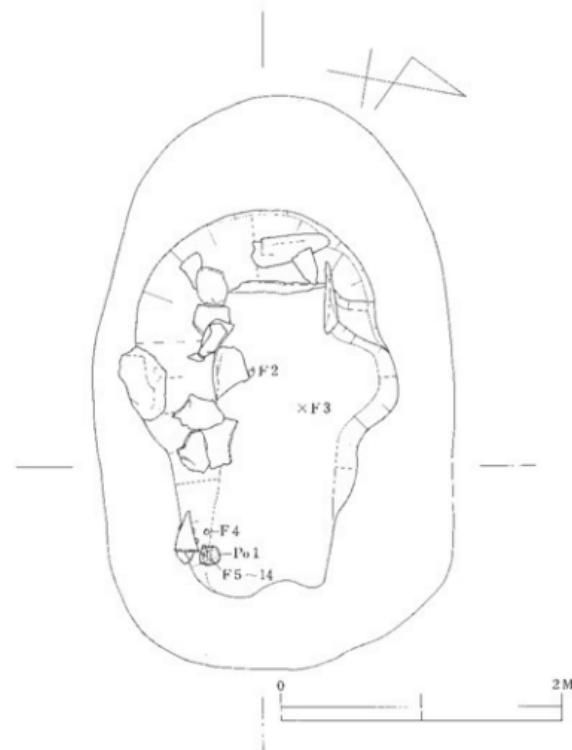
石棺の一部が確認され、さらに墓塚も確認された。埋葬施設は墳丘のほぼ中央部に位置する箱式石棺で、主軸をN-79°-Eにとっている。墓塚は2段で、1段目は長軸約4.1m、短軸約2.4m、2段目は長軸約3.55m、短軸約2.15mである。墓塚内には、東側の一部を残して破壊された石棺が検出された。石棺の推定の大きさは、長軸約2m、短軸約0.7mである。石棺内東側では、地山と考えた岩層上に約4cmの床面と思われる砂層が検出されており、棺内は約0.5m程度の深さと推定される。中央部より西側では、砂層は確認されなかつたが、盗掘等による破壊をうけたものと考えられる。また北側側壁際では、床面近くで刀子(F1)が検出されている。

蓋環Po1とPo2は、セットで検出されているが、蓋Po1が稜を持ち、口縁部に内傾する段をもつ占い型式が認められるのに対し、环身Po2は焼きも悪く、淡茶褐色を呈し、たちあがりも短いことから、同時期のものとは考えられず、伝世されていたPo1に、Po2を

重ねておいたものであろう。Po2より考えると、4号墳の時期は6世紀末～7世紀初め頃(陶色II-5)と考えられる。

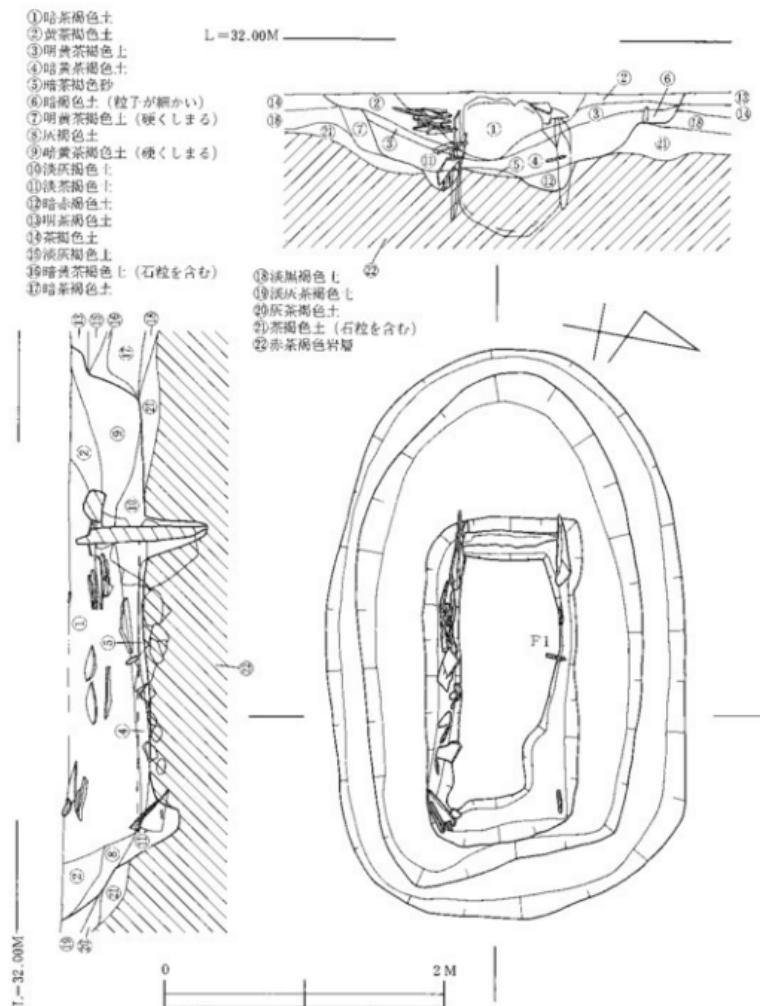
円護寺20号墳

円護寺4号墳の西斜面に、テラス状の半平坦な地形があり、古墳ではないかと考えられたため、テラス中央に東西にトレンチを入れたが、落ちこみ、遺物は検出されず、古墳ではないことが判明した。しかし、トレンチ断面を観察すると、この半平坦面は自然にできたものではなく、斜面の東側を削って、人為的に

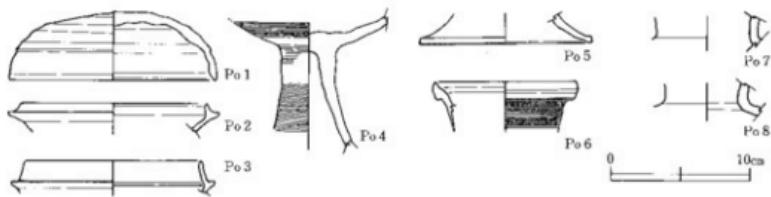


第5図 円護寺4号墳埋葬施設構造図 ①

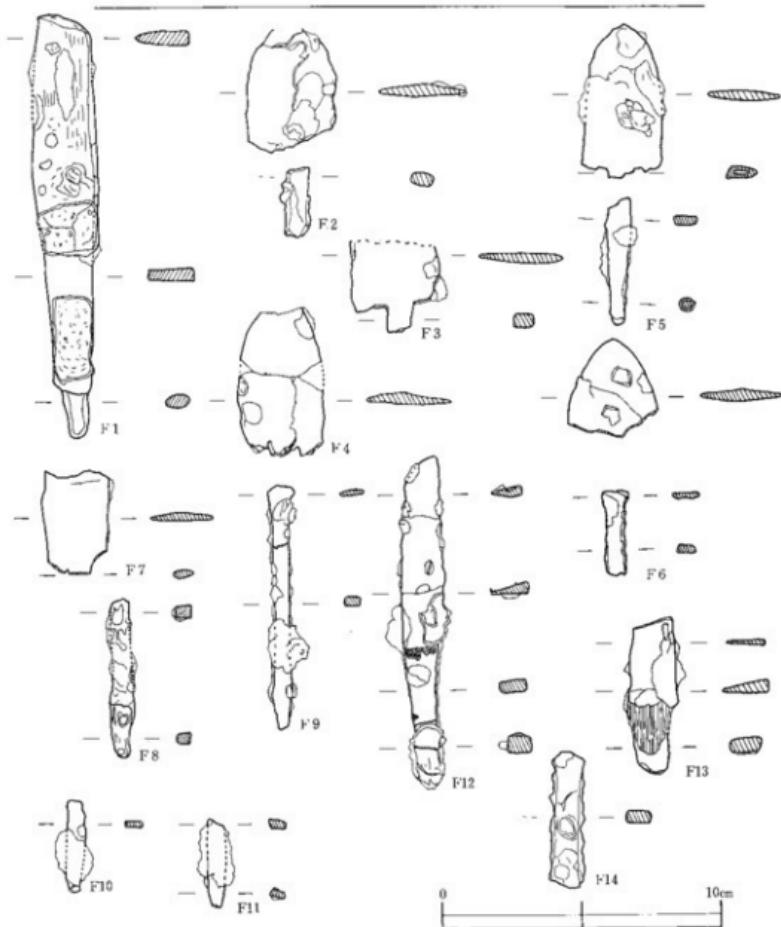
作られたものであることがわかる。とすればこの尾根には、秀吉による鳥取城攻めの際の土塁があることから考えて、土塁を造った際に造られた平坦地と考えられる。



第6図 円護寺4号墳埋葬施設遺構図 ②

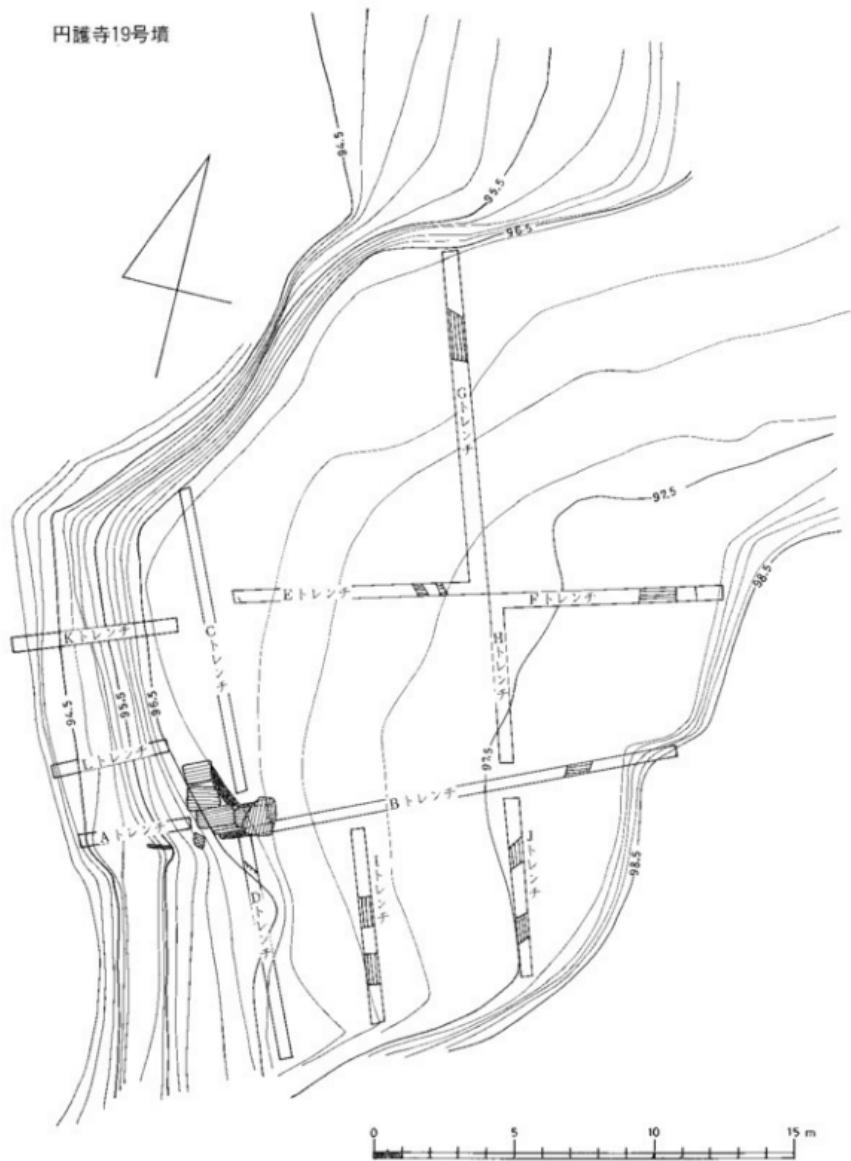


第7図-① 円護寺4号墳出土遺物その1(須恵器 S=1/4)

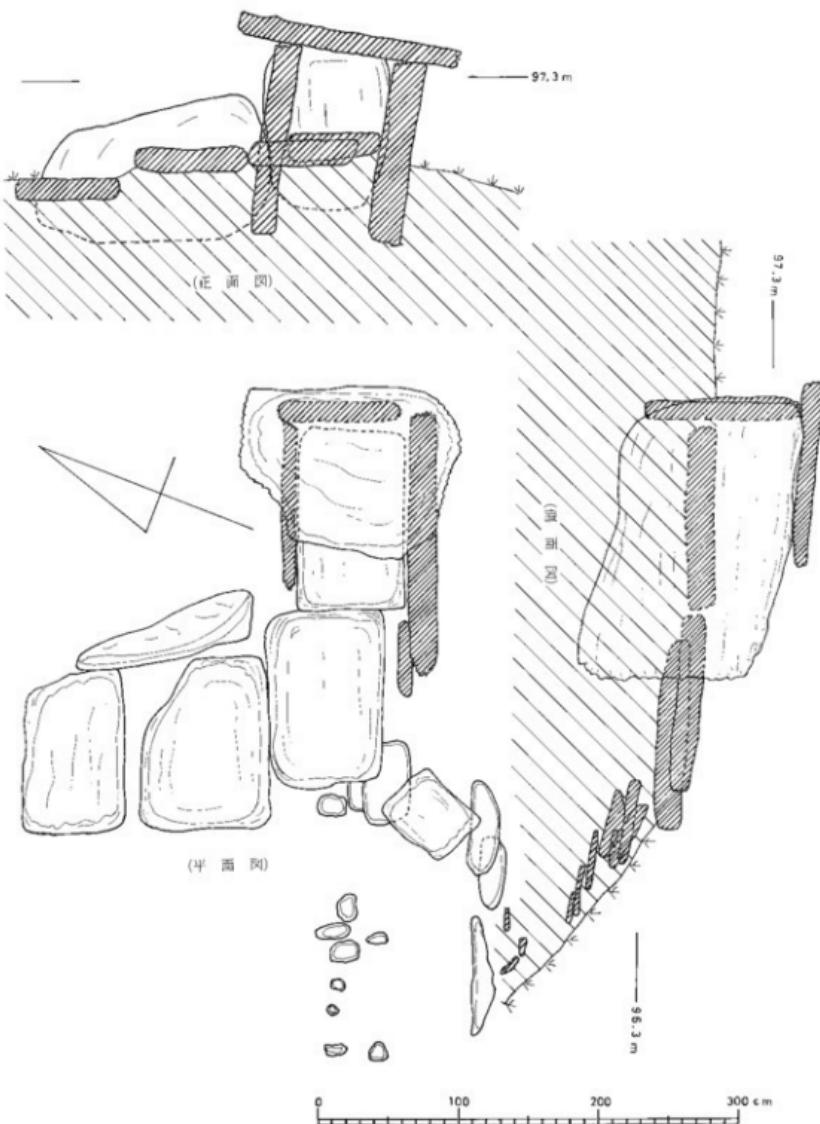


第7図-② 円護寺4号墳出土遺物その2(鉄器 S=1/2)

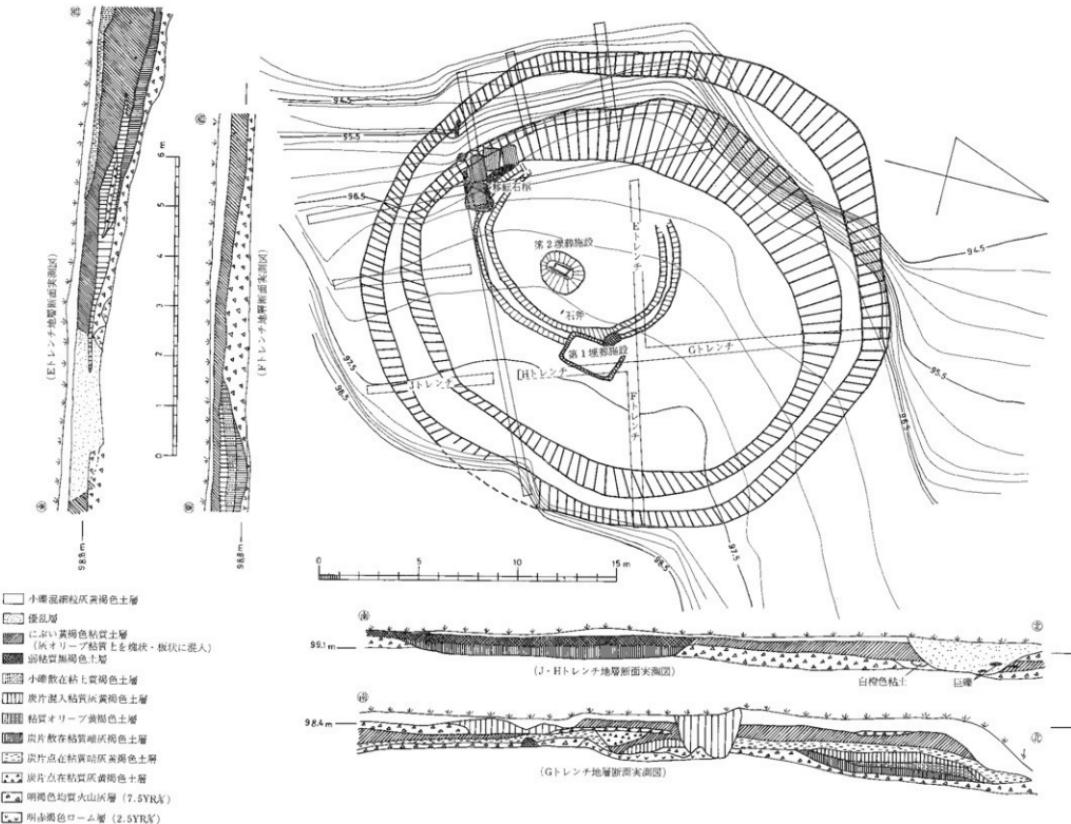
円護寺19号墳



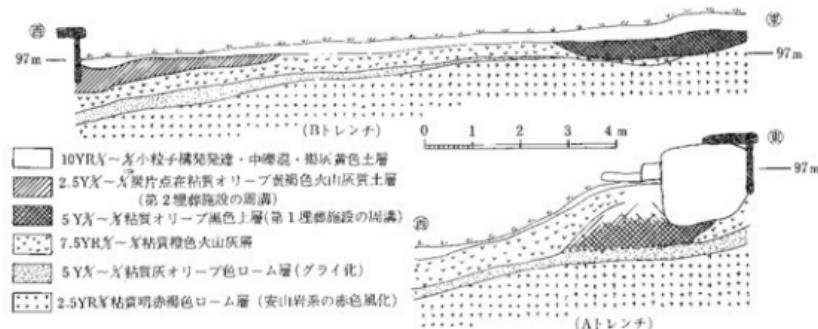
第8図 円護寺19号墳現況実測図



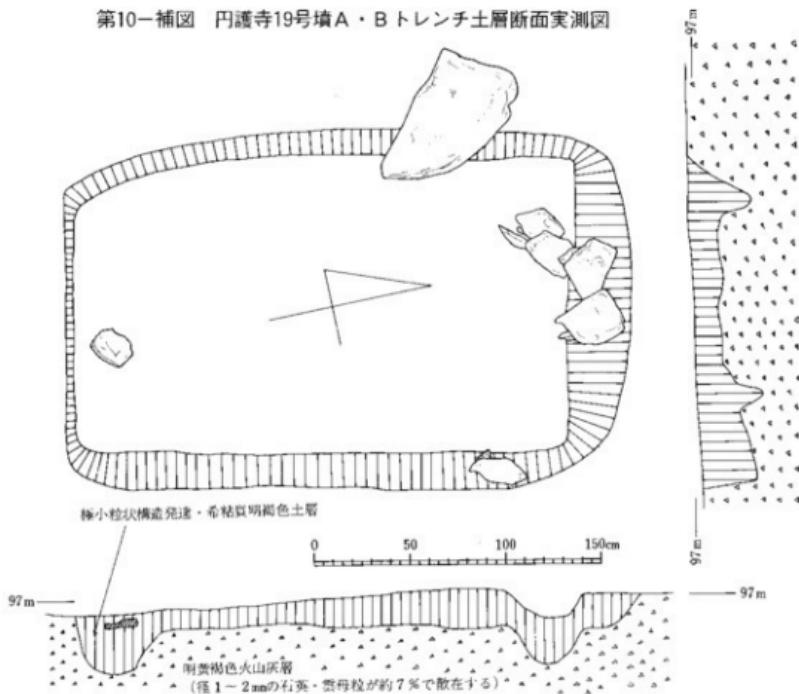
第9図 円護寺19号填移転石棺実測図



第10図 円謹寺19号填埋構図



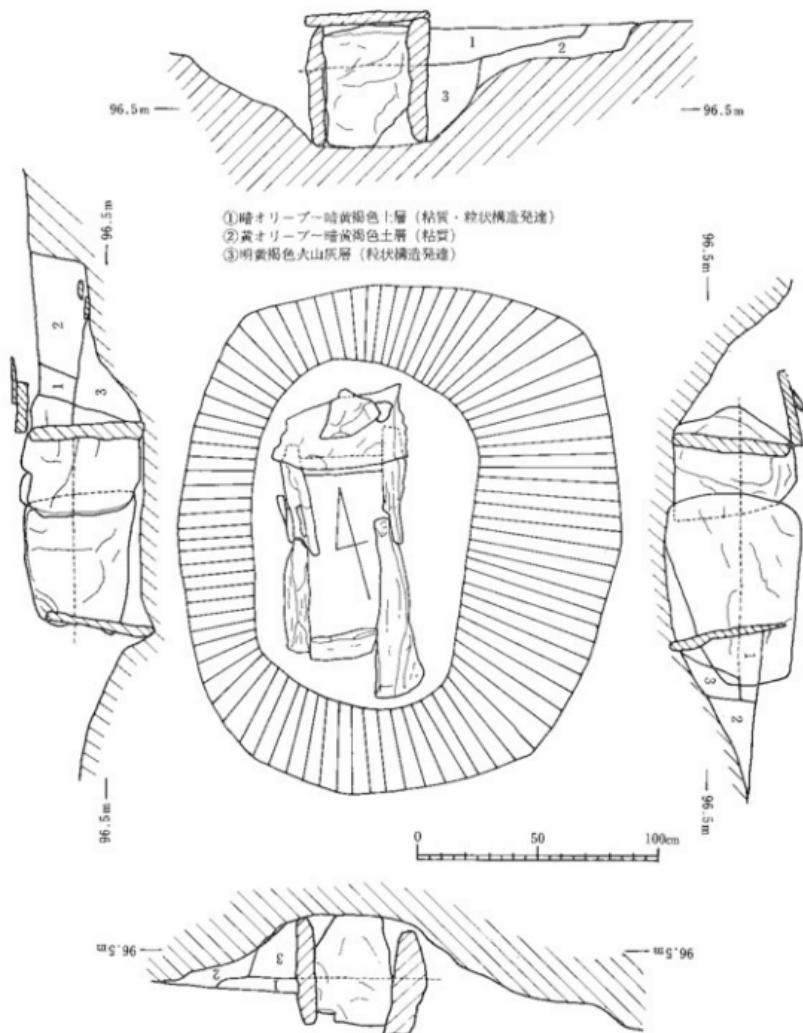
第10一補図 円護寺19号墳A・Bトレンチ土層断面実測図



第11図 円護寺19号墳第1埋葬施設実測図

円護寺字上ノ平ル、海拔約98mにあり、円護寺18号墳（前方後円墳）の北西約40mに陪冢の如く位置している。

残欠していた石棺は、戦後まもなくの開墾により破壊され移転されたものであり、第9



第12図 円護寺19号墳第2埋葬施設実測図

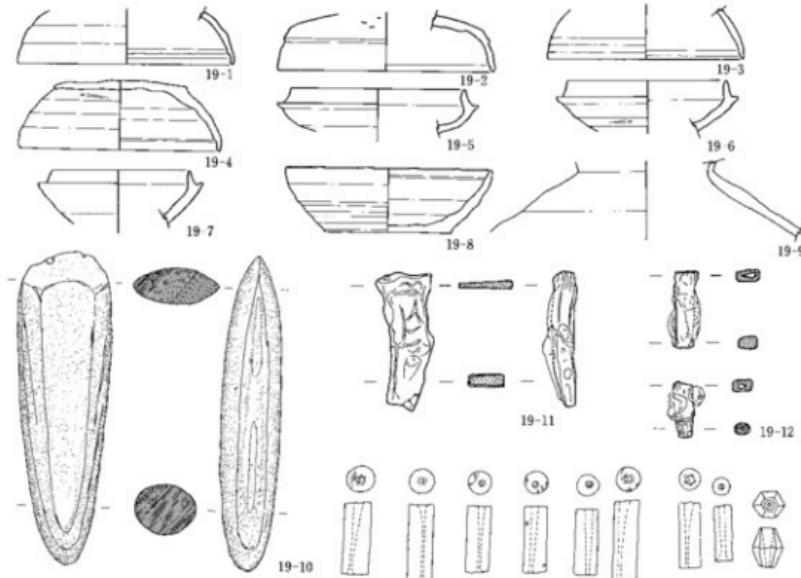
図に見る如くである。移転石棺は板状節理の発達した安山岩(120×90×15cm)を9枚・他で構成されており、これにより250×80×80cm程度の石棺が推定され、左右側壁と棺床に各2枚・両端各1枚・蓋石2~4枚を使用していたものと考えられる。またトレンチ法により検出された第1埋葬施設(第11図)の大きさも、これを支持するものと考える。

円護寺19号墳は、第10図に見る如く円墳であり、南北23m・東西20mの規模を有し、埋葬頭位は南又は北を示している。関連遺物としては、杯蓋(4)・杯身・高环(4)・壺(1)の須恵器・鉄鎌(2)・鉄刀様鉄器(1)、碧玉製管玉(8)・水呴製切子玉(1)があるが出土状況は不明である。実測不能な遺物も含めこれら関連遺物より、古墳造営時期を古墳時代後期後半と考える。

しかし、この古墳造営時期は円護寺18号墳(前方後円墳)の時期を示唆するものではなく、また円護寺19号墳の規模、遺物も陪冢としては立派すぎると考えられる。

円護寺18号墳の陪冢としては円護寺19号墳第2埋葬施設があり、第1埋葬施設との切り合い関係(第10図)及びその規模(直径9.5m)から陪冢と判断される円墳である。

第2埋葬施設(陪冢)は、東側壁2枚・西側壁2枚・小口に当る南北の短側壁には各1枚の板石が内側に挟み込まれ、横架された蓋石1枚が残されていた。底石、副葬品ではなく頭位があるとすれば、短側壁の板石の巾と厚さより北頭位と推定される。



第13図 円護寺19号墳遺物実測図(土器・石斧はS=1/4、鉄器・玉はS=1/2)

円護寺21号墳

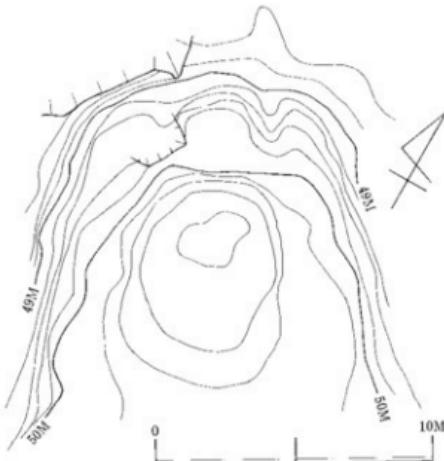
21号墳は字庵の城と呼ばれる尾根の端部近くに位置する。径約7mの円墳である。周溝は検出されなかった。墳丘断面からみて、最下層の赤茶褐色土が地山と考えられ、その上に約2.4mの盛土をすることによって、墳丘を造ったものと考えられる。築造にあたっては、地山を整形し、その上に土を一層盛り上げた段階で墓壇を掘り、側壁、小口の石を置いて、墓壇を埋めた後、その上を赤褐色土でしめ、板状の石をかませながら、さらに土を盛って蓋石をのせていったものと考えられる。

埋葬施設

墳丘のほぼ中央部にある箱式石棺で、主軸をN-29°-Eにとる。蓋石は、基本的には4枚であるが隙間をうめる形で、小型の石が5枚確認された。墓壇は長軸2.6m、短軸1.5m(南側)、1.2m(北側)で、その内側に、長軸1.8m、短軸0.9m(南側)、0.7m(北側)、蓋石から床面までの深さは約0.7mを測る石棺を検出した。側壁の石の枚数は、西側で4枚、東側で5枚であり、小口の石は、南側で2枚、北側で1枚である。また床面として、2~6cmの厚さで砂層が確認されている。

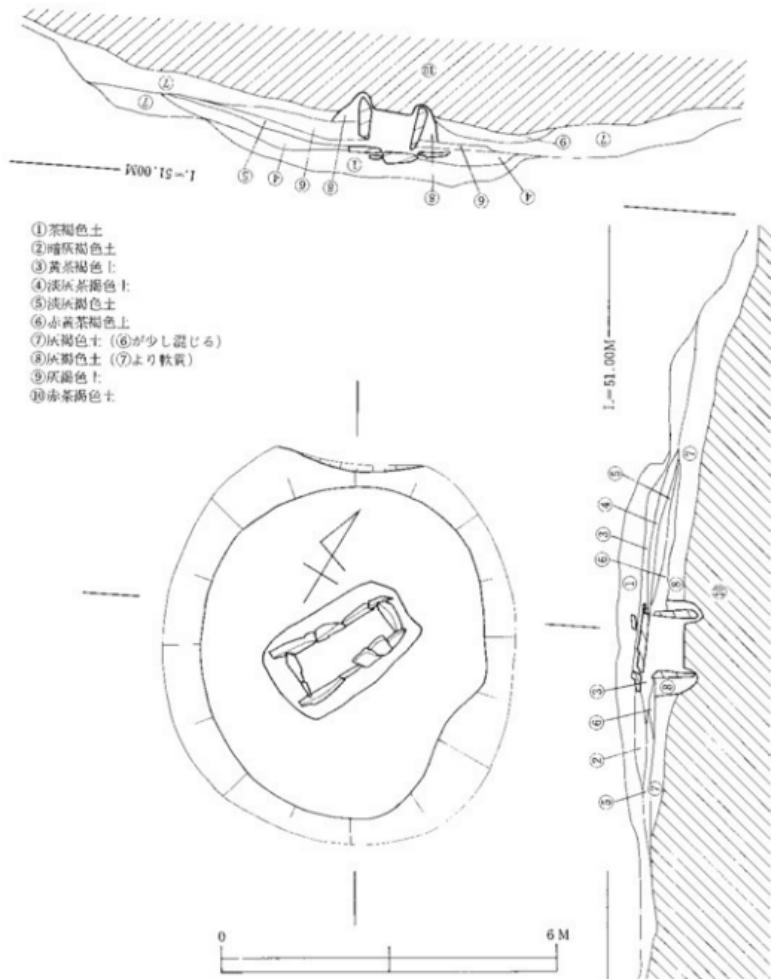
石棺内に埋土はほとんどなかったが、蓋石より剥離したと思われる石が、数個落ちていた。また、須恵器蓋坏多数、有蓋短頸壺、小壺、高环、提瓶、鉄鍔、刀子の他、頭蓋骨2個及び歯片(第6章参照)を検出している。

南小口際の東よりでは、頭蓋骨(B-1)が検出されたが、頭頂から左側頭部にかけて残っているのみで、近くで歯片が1片検出されている。B-1の両側には、蓋坏蓋(Po1)蓋坏身(Po2)がそれぞれ伏せた形で置かれていた。西よりには、下頸と後頭部、側頭部の一部を欠いた状態で、頭蓋骨(B-2)が検出され、その東側に蓋坏2セット(Po9と10、Po11と12)、西側には蓋坏1セット(Po7と8)と、刀子(F5)がおかれていた。またPo11上では、歯が検出されている。Po9と10は、Po2の上にのる



第14図 円護寺21号墳現況実測図

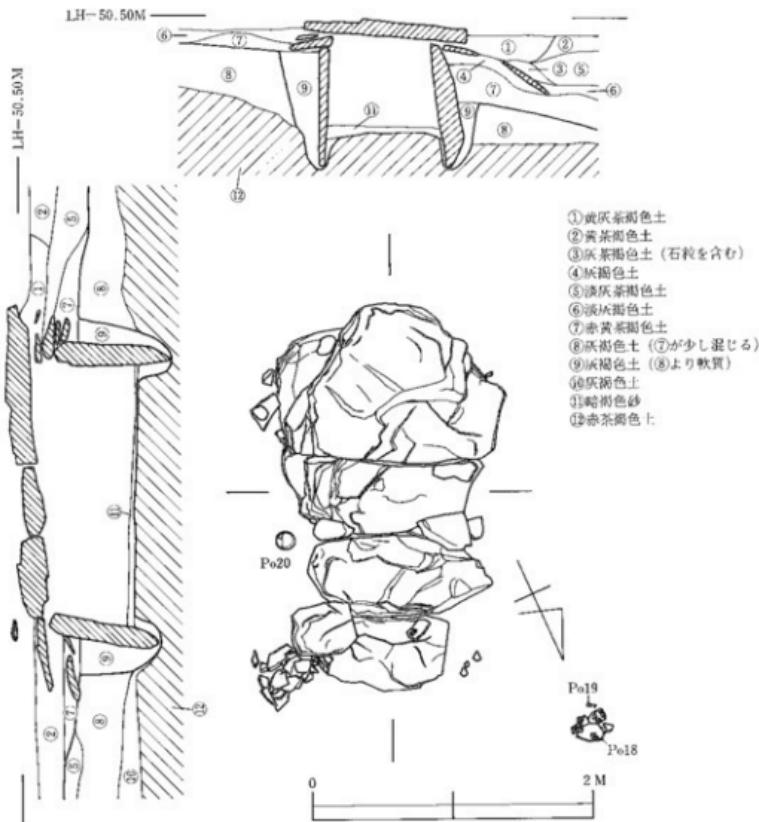
形で検出されている。東側壁際では、鉄鎌 4 本 (F1 ~ 4) が検出され、西側壁際北よりでは、有蓋短頸壺 (Po15) とその蓋 (Po14) が、蓋を開けた状態で検出されている。北側小口際には、東側より、蓋壺 (Po3 と 4) が蓋を開いた状態でおかれ、蓋 (Po3) の中に小壺 (Po13) がおかれていた。次に蓋壺 (Po5 と 6) がおかれ、西側に高壺 (Po16) と提瓶 (Po17) が並べておかれしており、骨片、歯片などは検出されなかった。Po6、Po10、Po13の中には



第15図 円護寺21号墳遺構図 ($S=\frac{1}{100}$)

赤色顔料が入れられていた。以上の点から、棺内の埋葬遺体は2体であり、蓋坏を枕として使用していたものと考えられる。蓋坏枕として使用されていたものとしては、Po1と2、及びPo7と8、Po9と10が考えられる。

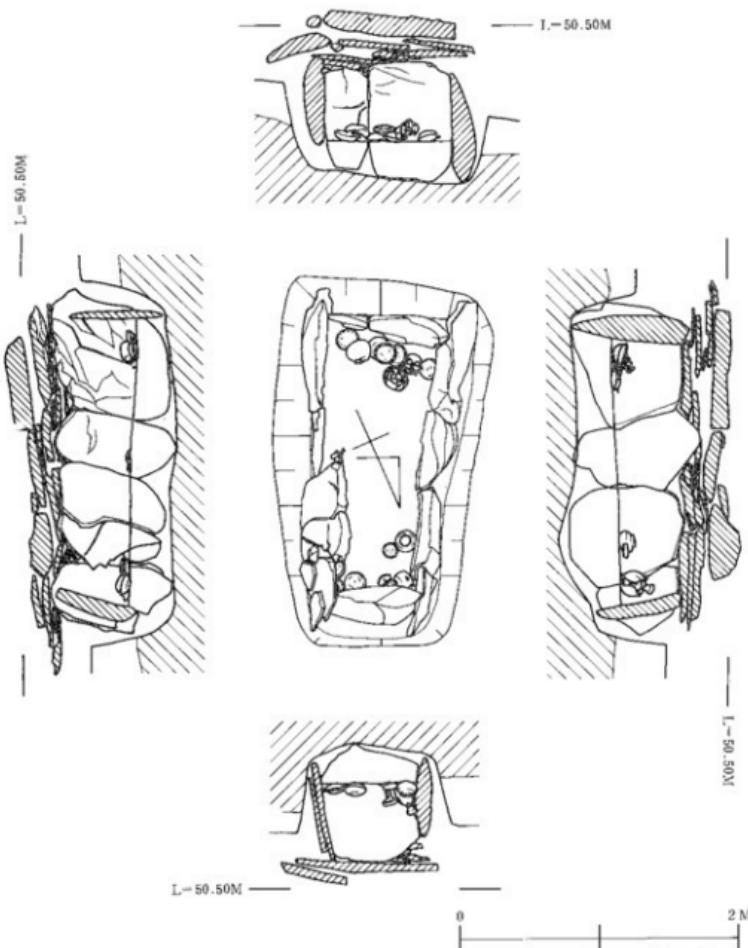
遺物の中で、蓋坏を比較してみると、頭蓋骨B-1の枕としたPo1と2、B-1の足元にあるPo3と4は、頭蓋骨B-2の枕とした。Po7と8、Po9と10よりも径が大きく、また整形技法もPo7とPo9がヘラ切りで仕上げているのに対し、Po1-4はヘラ削りのみで仕上げられていることなどから、B-2に伴う上器よりも、やや先行するものと考えられる。しかし、墳丘断面からは、追葬が行なわれたと考えられる層位は認められず、B-2を葬る際に、B-1も埋葬したものと考えられよう。よって、21号墳の時期は6世紀



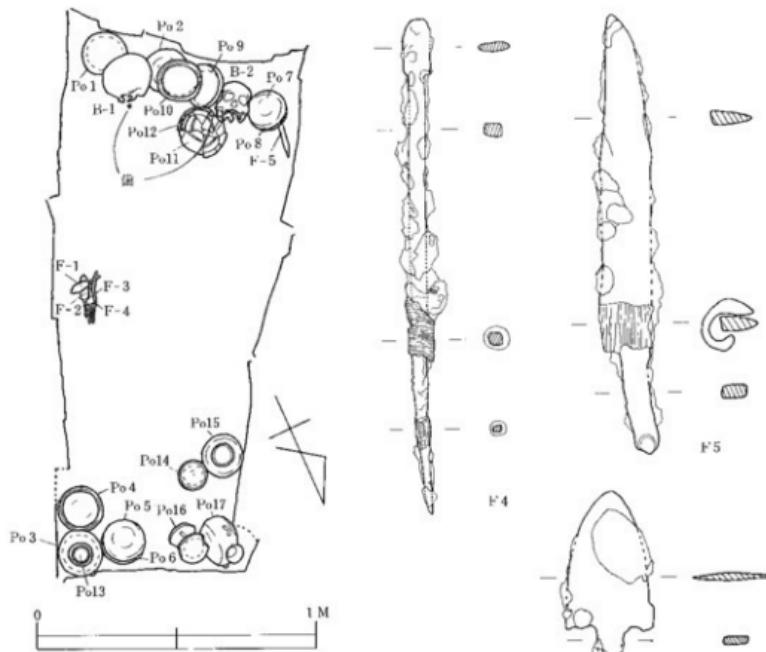
第16図 円護寺21号墳埋葬施設蓋石実測図・断面図

末～7世紀初め頃（陶邑II-5）と考えられる。

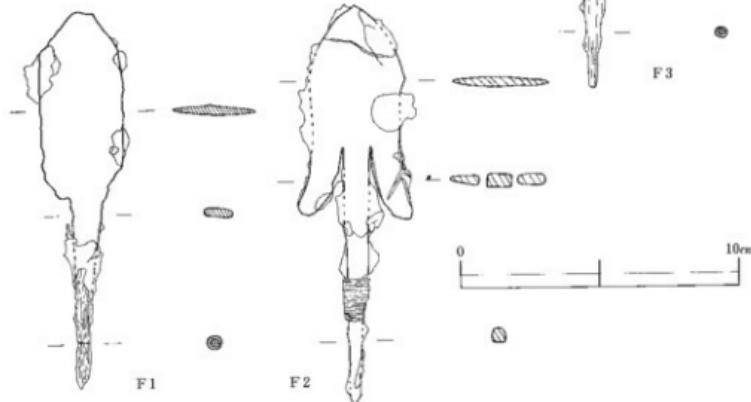
蓋石上、及び蓋石から北へ約1mの地点で須恵器壺（Po18）が検出されているが、かなりもろく復原は不可能であった。これは埴輪の代りとして儀礼用の意味をもつものであろう。また、蓋石から北へ1mの地点では、他に須恵器蓋坏身（Po19）が検出されており、蓋石南側では蓋坏身（Po20）が検出されている。



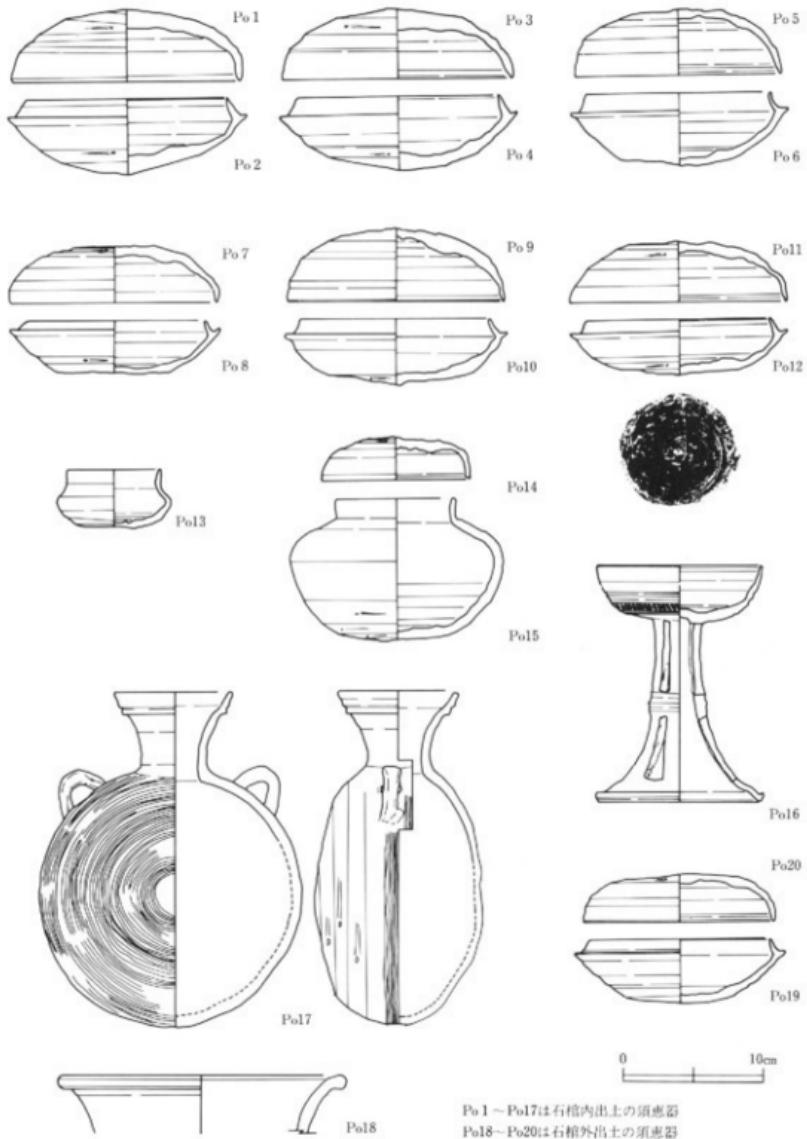
第17図 円護寺21号墳埋葬施設展開図



第18図-①
円護寺21号墳埋葬施設遺物出土状況



第18図-② 円護寺21号墳埋葬施設出土遺物 その1 (鉄器 S=½)



Po 1 ~ Po 17は石棺内出土の須恵器
Po 18~Po 20は石棺外出土の須恵器

第19図 円護寺21号墳埋葬施設出土遺物その2 (S=1/4)

円護寺22号墳

円護寺22号墳は、今回の調査で発見された古墳である。位置は、字古屋敷の土塁がめぐる砦跡のある尾根の南で、南西にのびる尾根上である。砦跡のある尾根頂より7m程低い場所にある。

古墳確認のためのトレンチを尾根に沿って入れたところ、黒褐色の落ち込みを検出したので、墳丘全体の表土を除去すると、黒褐色土層が円形にまわっており、古墳の周溝であると判断した。周溝中央間の径約10mの円墳である。西側は古墳築造後崩壊したと思われ、周溝は確認されなかった。また南西にのびる尾根方向の周溝もない。

墳丘内に埋葬施設は検出されなかった。これは、墳丘断面でわかる通り、すでに盛土を失っていることから、風雨による浸蝕によって盛土とともに消失してしまったためと思われる。墳丘上でPo.1の須恵器片を探集したが、他に遺物はなかった。

しかし、周溝の北外側に小型の箱式石棺である第1埋葬施設を検出した。主軸をほぼ東西にとり、やや西北西—東南東方向にずれる。石棺は長軸105cm、短軸20cmときわめて細く、蓋石と床面までの深さも15cm程度である。蓋石は、大きなもので50×50×10cm程度の偏平な石を主軸にそって8枚並べている。側壁は南北ともに2枚で作り、2枚の間はすきがある。小口は東西ともに1枚である。石棺の石材は、いずれも地山の赤褐色土層に含まれる礫と同質のものである。遺物は棺内外とともにない。石棺の大きさ・粗雑な作り・遺物がないことから、この石棺に入間が埋葬されたとは考えたいが、何を納めたのか、あるいは何も納めなかつたかは不明である。

円護寺22号墳の時期を正確に言うのはむづかしいが、墳丘上で採集された須恵器片から考えると、6世紀前～中葉と思われる。

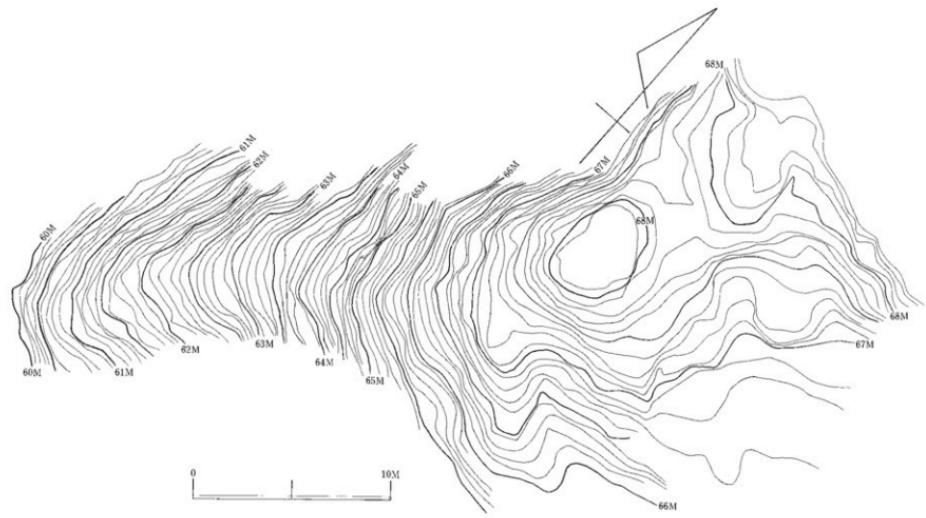


第20図

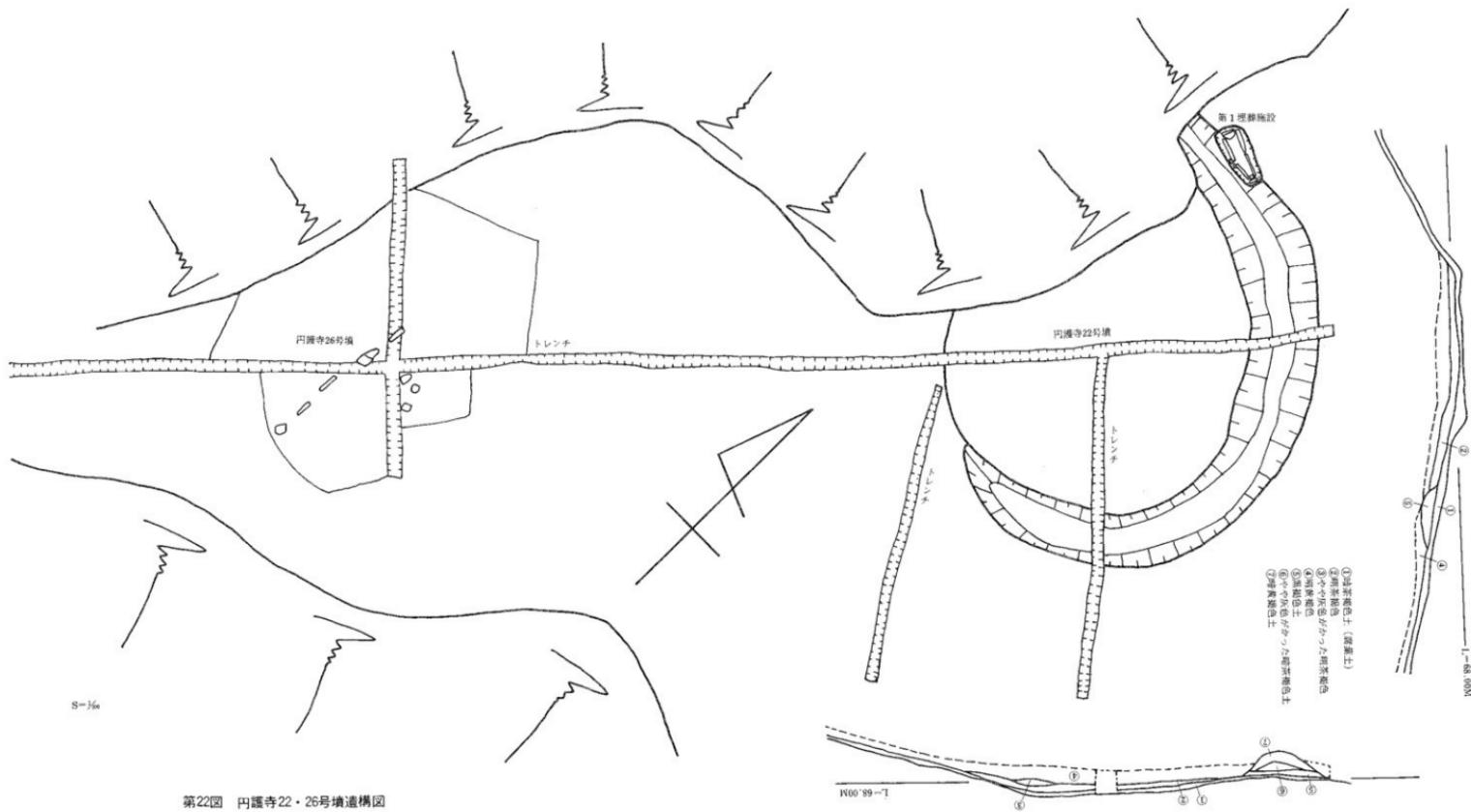
円護寺22号墳遺物実測図

円護寺26号墳

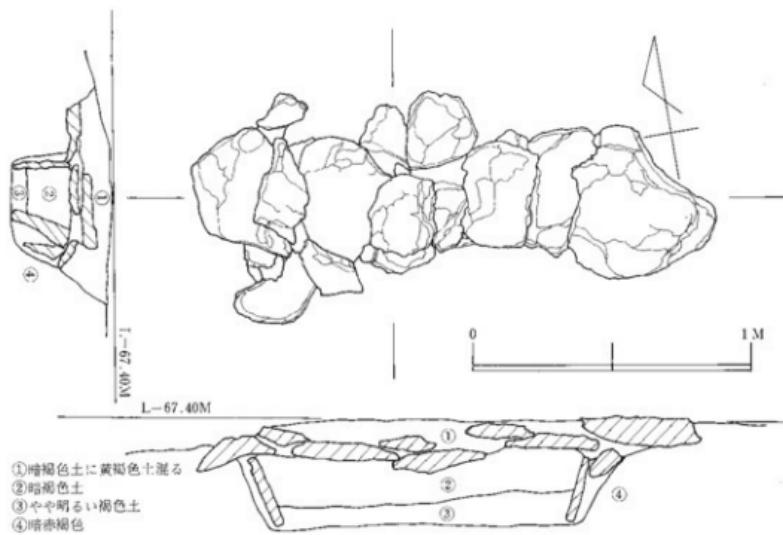
円護寺22号墳下の南西にのびる尾根に、古墳確認のためのトレンチを入れたところ、ほぼ直立した偏平な石があり、石棺ではないかと判断し、古墳として調査した。周辺の表土を除去し、尾根に垂直にトレンチを入れたが、直立した石は石棺状に広がらず、また掘り方らしきものもみつからなかった。石質も、地山内に含まれる石と同一であった。周溝と思われる落ち込みもなく、遺物も一点も出土していないことから、円護寺26号墳は古墳ではなく、自然地形によるものと判断した。



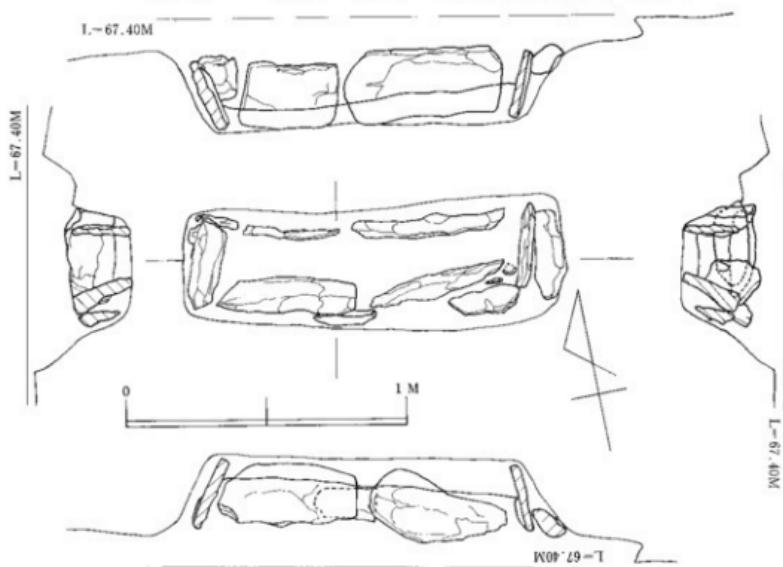
第21図 円護寺22・26号墳現況実測図



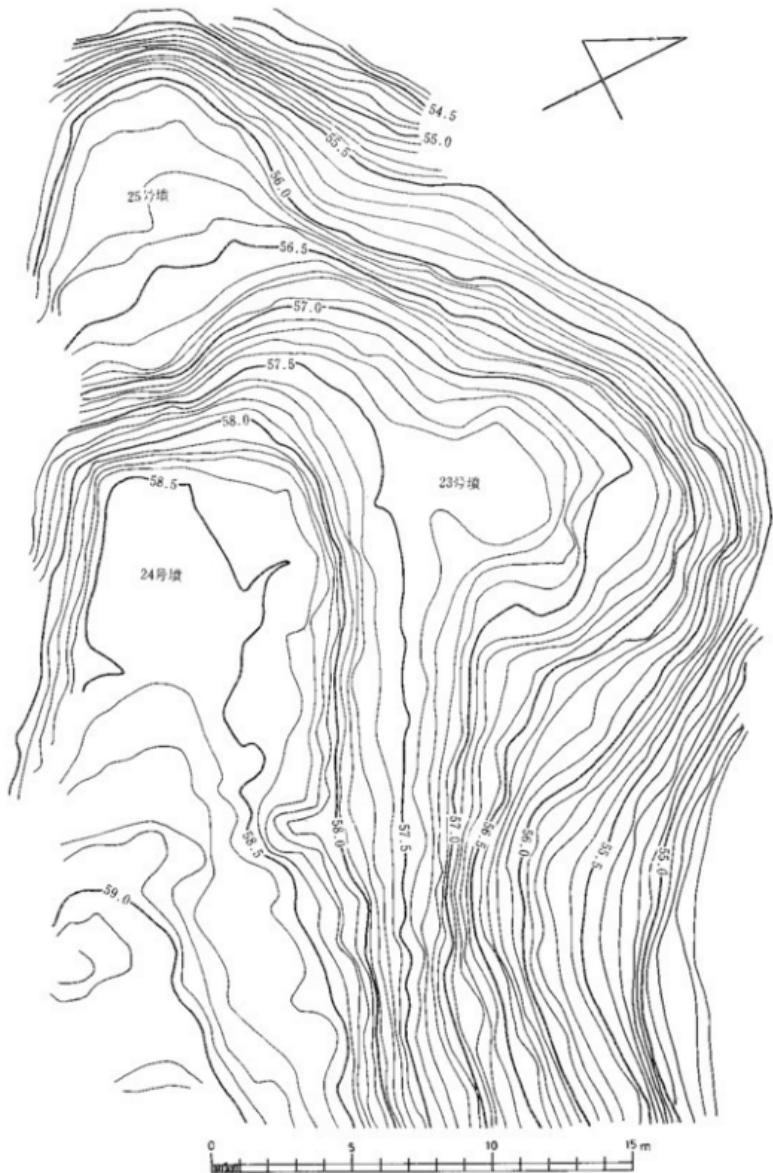
第22図 円護寺22・26号墳造構図



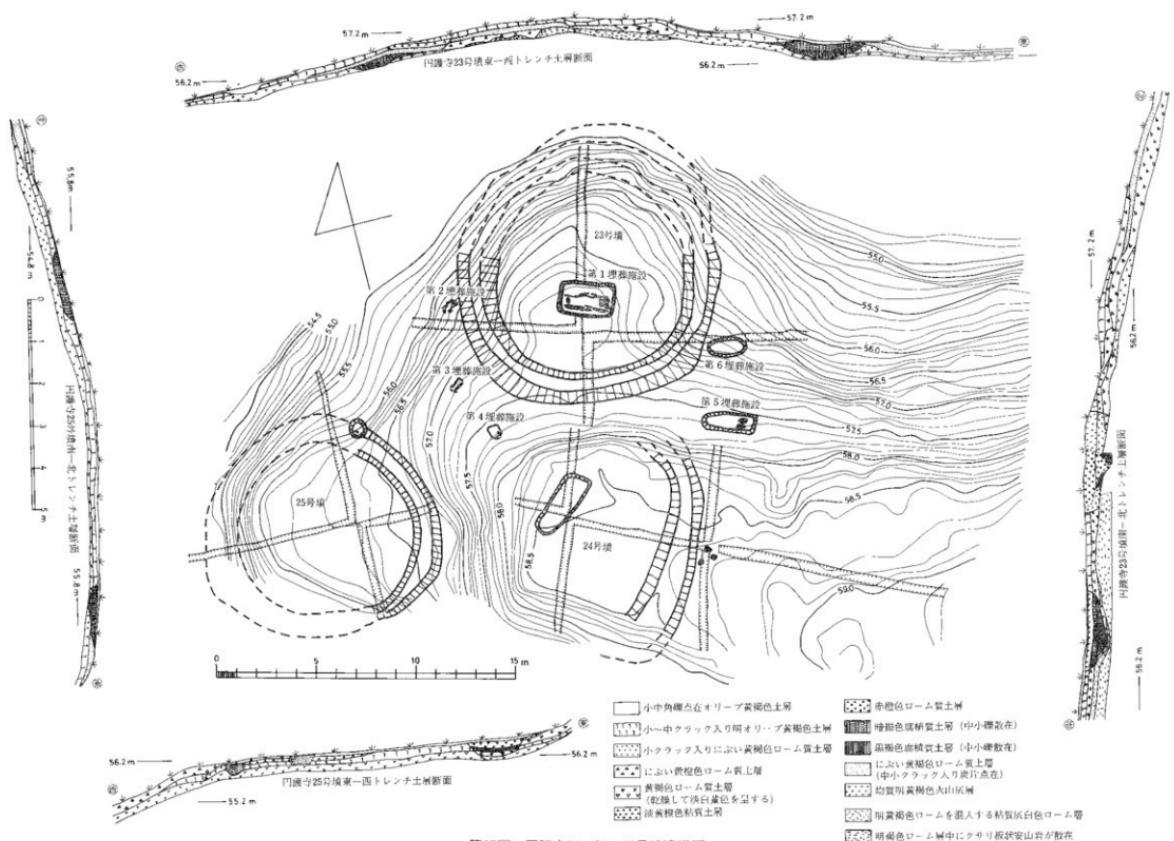
第23図の1 円護寺22号墳第1埋葬施設蓋石実測図・断面図



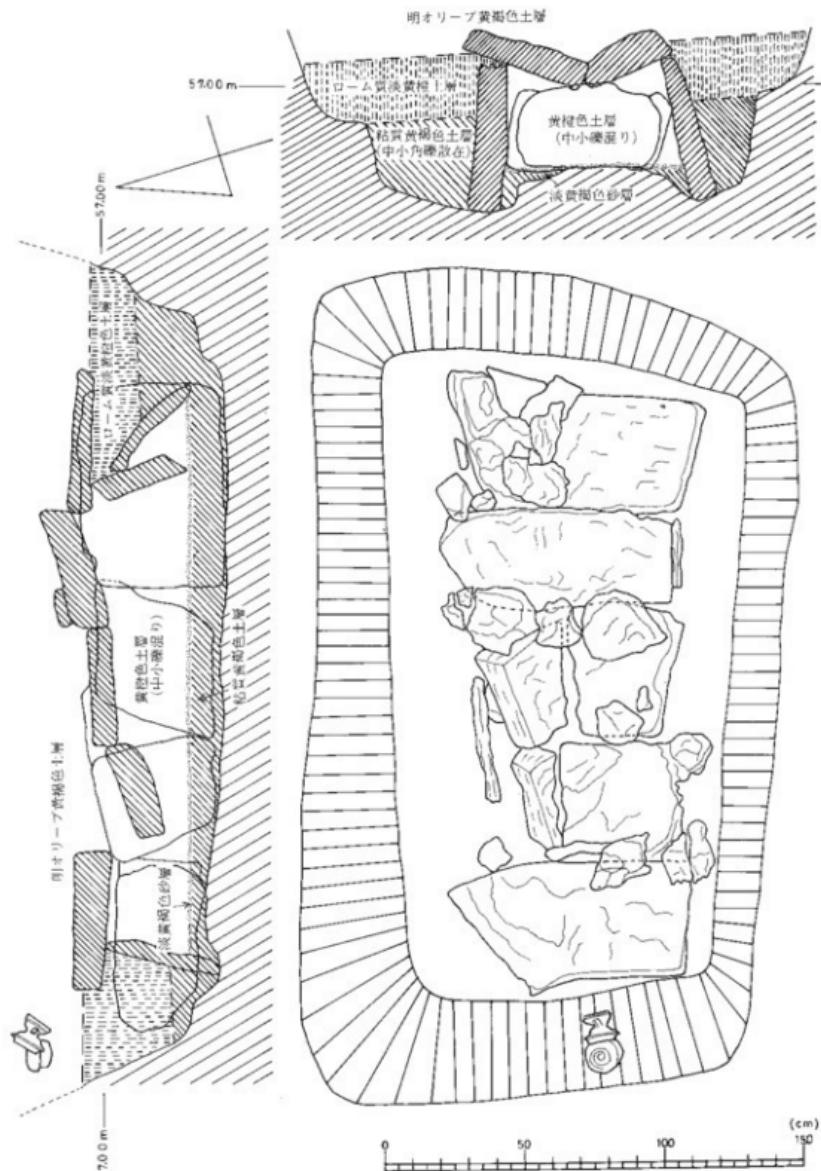
第23図の2 円護寺22号墳第1埋葬施設展開図



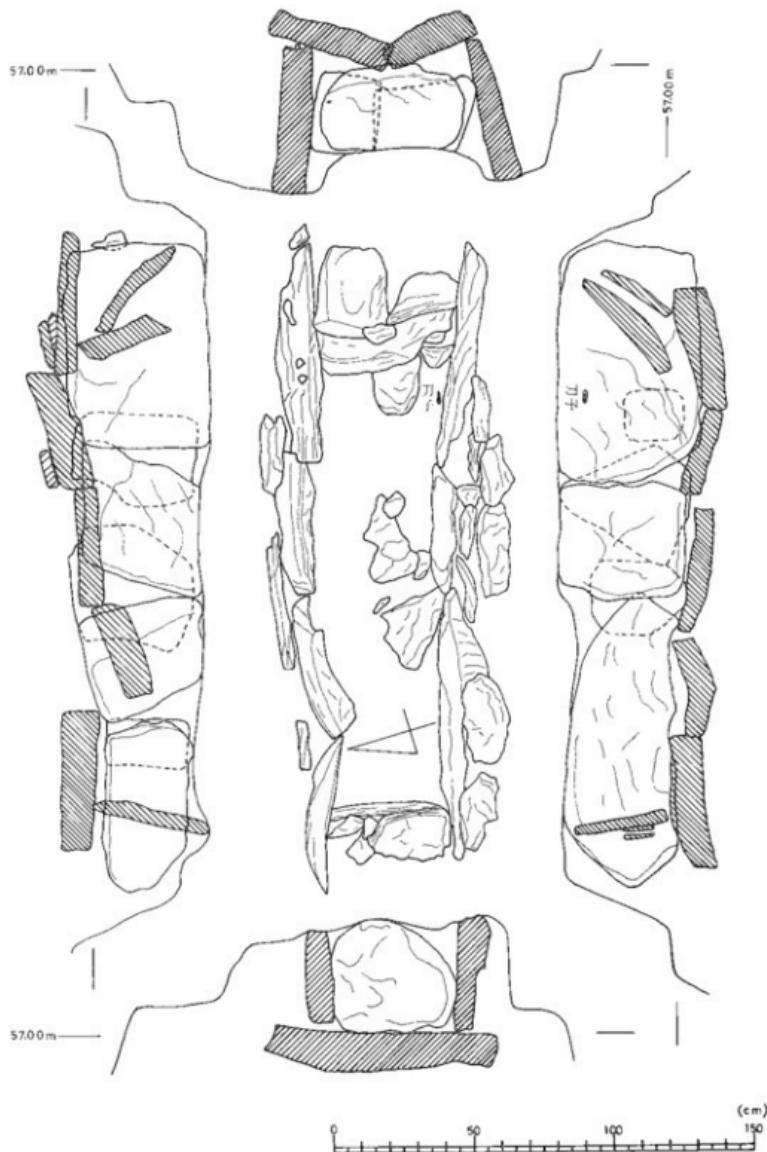
第24図 円謹寺23・24・25号墳現況測図



第25図 円謹寺23・24・25号墳遺構図



第26図 23号墳第1埋葬施設蓋石実測図



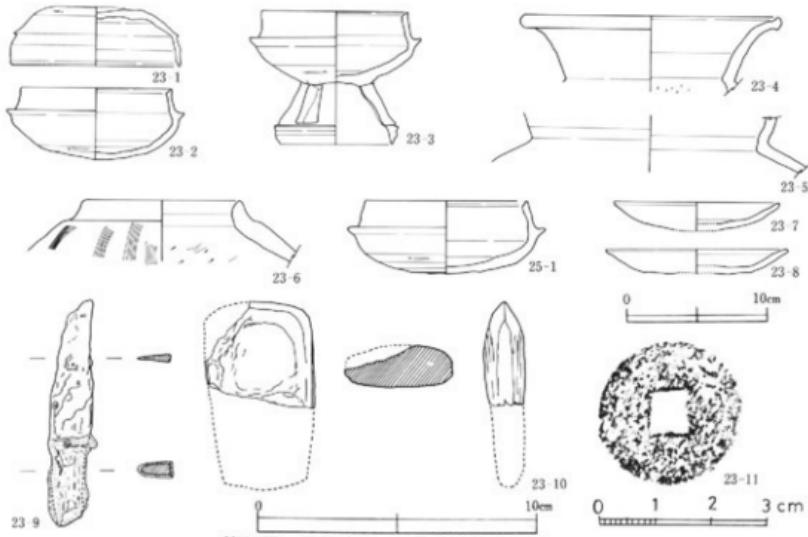
第27図 23号墳第1埋葬施設展開図

円護寺23・24・25号墳

円護寺18号墳（前方後円墳）より西北西方向へ分岐する緩やかな稜線を約300m下り、庵ノ城の手前50mにコル状の地形があり、コル状地形への傾斜遷急点で稜線の北斜面を利用するかの如く3基の古墳が隣接している。標高57m付近に位置する3基の古墳は共に円墳であり、比較的保存状態の良い23号墳の規模は直径11.5m、保存の悪い24号墳は直径約10m、周溝のみ残る25号墳は直径約10mの規模を有している。（第24・25図参照）

まず23号墳から見ると、周溝は稜線寄りの南半部で保存が良く、北半部は流出している。墳丘中央付近のやや稜線寄りに主たる埋葬施設が一基（第1埋葬施設）があり、墳丘外方の西部周溝寄りに第2・3・4埋葬施設である小型箱式石棺があり、同じく墳丘外方の東部周溝寄りに石蓋木棺墓（第5埋葬施設）と土壇状遺構（第6埋葬施設）があり、これら全てを23号墳として把える事とするが、第2・3・4埋葬施設を陪葬として理解出来ても第5・6埋葬施設については伴出遺物が無い事など、陪葬とする責極的根拠が無く、第1埋葬施設との直接的な関係の有無を判断する事は困難である。

23号墳第1埋葬施設（第26・27図）は23号墳の主要埋葬施設であり、組合式箱式石棺である。蓋石は90×40×10cm大の板石を5枚使用していたが、その内の3枚は横架されたままの状態で半壊しており盗掘はされていない。粘土等による目張りではなく、板石接合部分

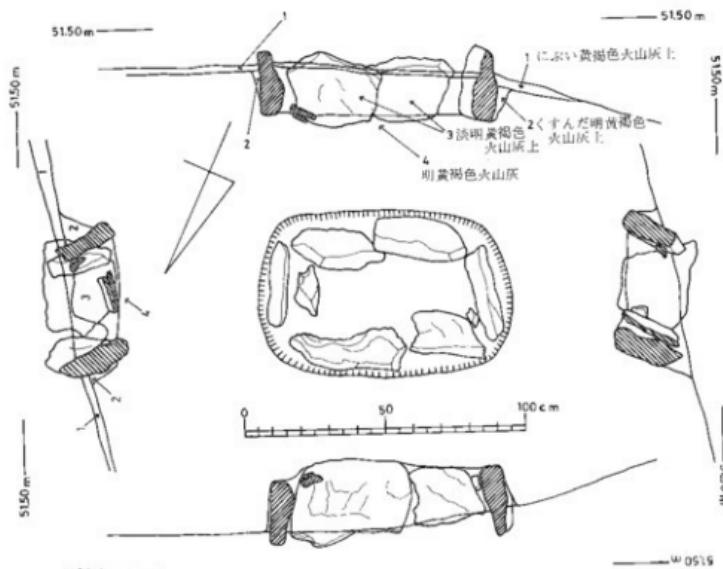


第28図 円護寺23・25号墳遺物実測図

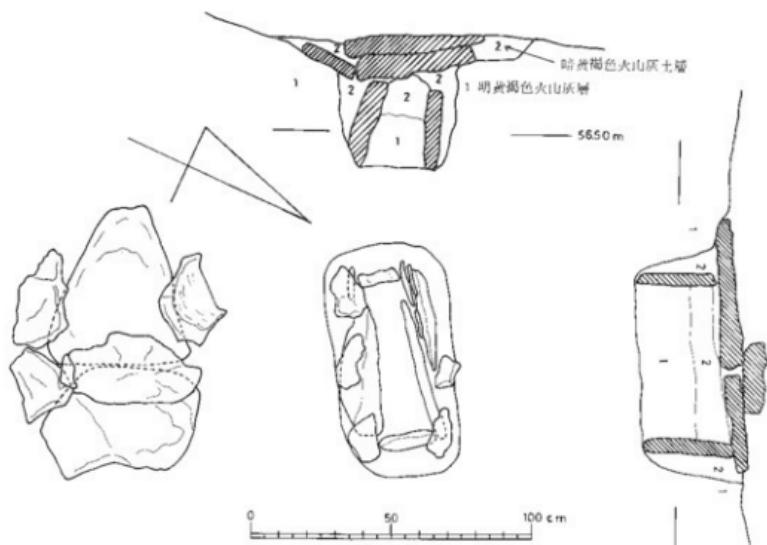
の隙間は20cm大の板石で被覆し蓋石の効果を上げている。北側の長側壁は板石4枚を連ね、その裏にも3枚の板石を配して隙間を埋めている。南側壁は3枚の板石を連ね、裏には3枚の板石を配している。これら裏に配された石材は、石棺の上縁を擣える目的と板石接合部の隙間を埋める為そして側壁が倒れない様にするための裏込石としての役割を持たれている。東側の短側壁は板石1枚とその裏の2枚の石材より成り、西壁は板石1枚と薄い2枚の裏込石より構成されている。

石棺内法は、長さ205cm・東壁巾60cm・西壁巾45cmを測り東壁巾が広くつくられている。小口を構成する短側壁の石材の厚さを見ると、東壁が8cm・西壁が5cmであり東壁の方がやや厚い。又、東・西壁の床面高は東高西低であるにも拘らず、棺床までの深さは東壁35cm、西壁30cmとなっている。以上により埋葬頭位は東と判断する。そして短側壁が長側壁に挟まれている例は多く認められるが、西短側壁は長側壁の地山高と略同高で挟まれ、東短側壁は長側壁より高い地山高で挟まれている。視点を変えると、頭部にある石材には立派な板石を使用しているが足部の石材はやや貧弱であると云えると同時に、足位にある短側壁は頭位の短側壁よりも最初に挟まれて石棺構築された可能性がある。

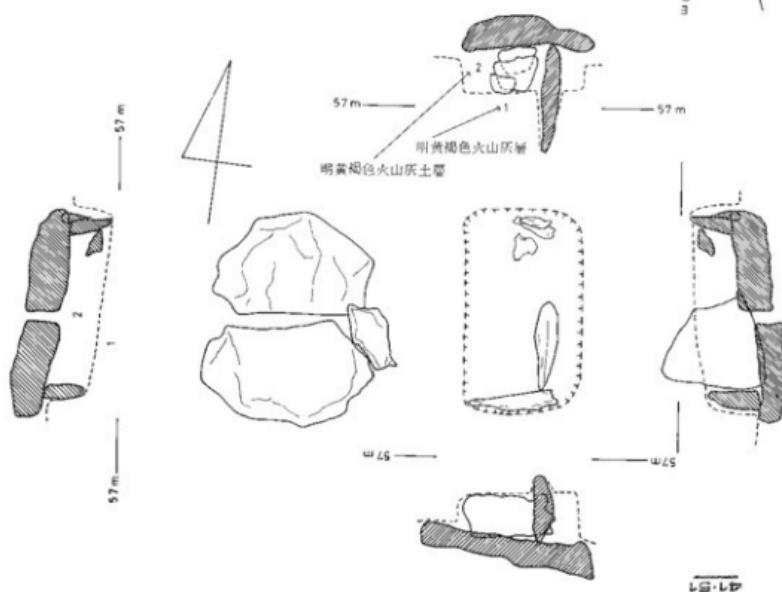
また、棺床には石材は使用されてなく、地山の上に均質な淡黄褐色砂（砂丘砂の可能性がある）がうすく敷かれていた。



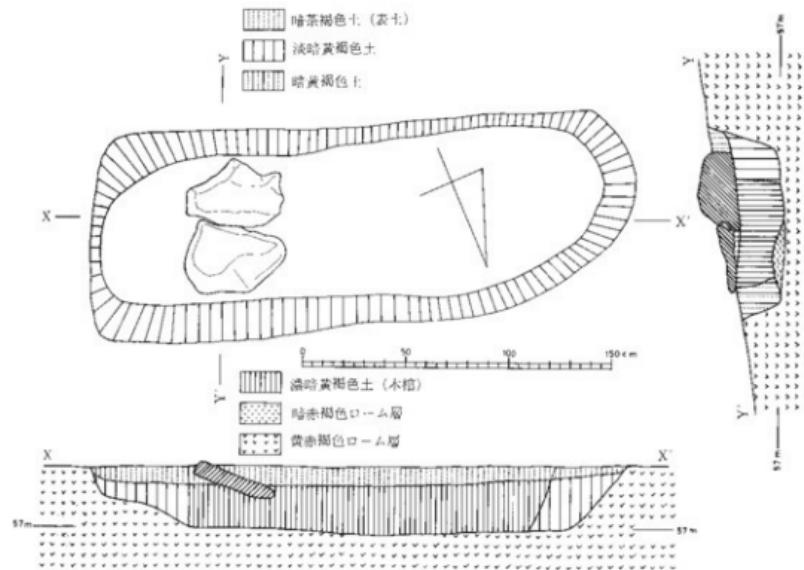
第29図 円護寺23号墳第2埋葬施設実測図



第30図 円護寺23号墳第3埋葬施設実測図



第31図 円護寺23号墳第4埋葬施設実測図



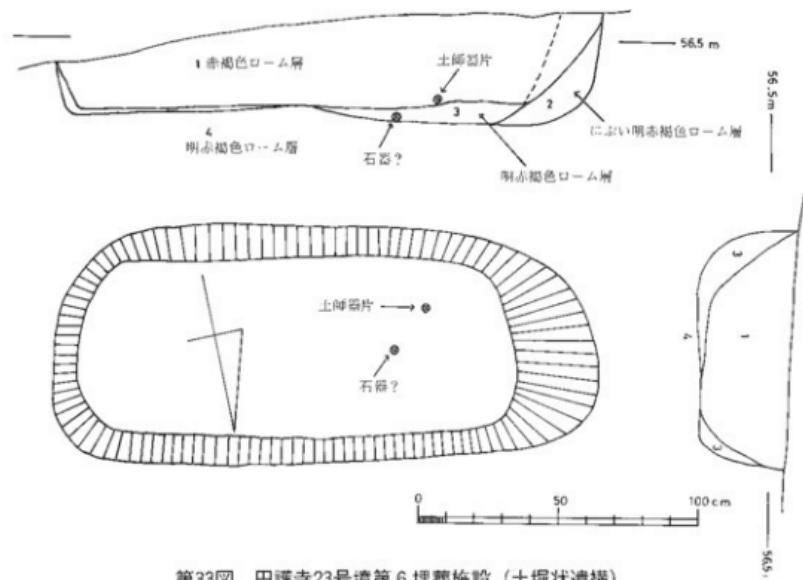
第32図 円護寺23号墳第5埋葬施設（石蓋木棺墓）

副葬品は刀子1本のみで、供獻土器として赤色顔料（ベンガラ）約280ccを入れ蓋がされた壺と、その傍で出土した短脚三方透しの高杯がある。この供獻土器は石棺蓋石よりやや上位の足側棺外（第26図）の豎穴内より出土している事より、遺体安置後、蓋石設置前後に何らかの葬送儀式がなされたものと考える。また墳丘北部の表層より甕の口縁部片も検出し、胎土が埴輪様土器片（遺物23-7）を第1埋葬施設足位周溝内で出土している事より、墳丘築造後にも何らかの祭祀が行われたものと考える。

23号墳第2埋葬施設は蓋石のない小型箱式石棺であり、長側壁各2枚、短側壁各1枚により構成されている。短側壁が長側壁を挟むように組合せられている事に特色があり、土師器の甕片（遺物23-5）を作出している事及び甕の大きさを考えると器物埋葬用石棺と推定され、階家としての性格を位置付けている。

23号墳第3埋葬施設は長側壁各2枚と裏石、短側壁各1枚そして蓋石2枚と口張用石4枚により構成され、短側壁が長側壁に挟まれ、北短側壁が巾広につくられている事より北頭位と推定され第1埋葬施設方向が頭位となっている。副葬品は検出していない。

23号墳第4埋葬施設は南短側壁1枚、東長側壁1枚、並列した北短側壁3枚と蓋石2枚より構成されている。長側壁に挟まる如く配されている点では第2埋葬施設と葬施設と



第33図 円護寺23号墳第6埋葬施設（土壙状遺構）

同種石棺の感があり、粗雑に作られている事にも頗ける。遺物は出土していない。

23号墳第5埋葬施設は長さ165cm、巾50cm、深さ不明の木棺に蓋石をのせた石蓋木棺墓である。副葬品はない。

23号墳第5埋葬施設は実測不能な土師器1片を出土したのみの長棺円型土壙状遺構であり、第5埋葬施設と共に時期等の判断は困難。

円護寺24号墳は墳丘中央付近に埋葬施設1基を有したと考えられる古墳であるが、遺物としては実測不能な土師器片のみで、北東頭位であった事と推定させるだけである。

円護寺25号墳は南東部周溝内より遺物25-1の他、須恵器片3、土師器片1を出土している。

23・24・25号墳の築造時期は六世紀前半と推定し古墳時代後期前葉と考える。強いて築造順を決めるならば23-25-24の順となるかも知れない。

円護寺27号墳

円護寺27号墳は字北谷山と呼ばれている尾根の中腹に位置している。周溝総径約18m、経約12m、周溝幅約2.3mの円墳であるが、尾根の傾斜を利用しているため、墳丘の東側、南側にかなりの傾斜がみられる。墳丘断面より観察すると、最下層は赤茶褐色層となっており、これが地山と考えられる。墳丘は地山整形と、地山の上に約1mの上盛りをすることによって造られたものと考えられる。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央部におかれ、厚さ15cm程度の石を小口積みにした横穴式石室である。地山上に30~50cm程度の上盛りをした後、これを地山層まで掘り下げて墓塙を形成し、基底部の石を墓塙と平行に横長に並べ、2段以上の石は墓塙に直角になるようく小口積みしているが、3~4段積み上げた段階で墓塙を埋め、さらに石を積み上げながら土盛りをしていったものであろう。下層の数段を残して石積みを除去してしまったため、完全な記録とはならなかつたが、地表近くの石室上層と考えられる部分は、厚さ10~20cm程度の石を2重に積み上げる形となつておらず、上部にいくにしたがつてすぼまる形に造られており、古い様式を示すものである。天井石は、その形状をとどめていないが、地表近くにある側壁の石よりも、かなり厚く大きな石が石室内に落ちこんだ形で3枚検出されている。これが天井石の一部と推定されるが、数枚の石を並べて天井を形成していたものと思われる。石室の主軸はN-60°-Eである。玄室は、長軸2.8m、短軸1.7m(奥壁側)、1.45m(羨道側)を測る。玄室の奥、3分の1あたりには板石を3枚並べた仕切りが設けられ、玄室内を前室(羨道側)と後室(奥壁側)に分けている。後室は、長軸2.8m、短軸1.0m(奥壁に向って右側)、0.75m(左側)を測り、平石が8枚敷かれている。その上に厚さ約5cmの砂層が検出されており、これが床面であると考えられる。前室にも雑ではあるが、石敷が検出されている。残存している石積みの上部から床面までの高さは、約1.2mを測る。羨道部の側壁も石を小口積みにして造られているが、石室に向って右側の側壁基底部は大きな石を横長においている。また幅約20cm、高さ約45cm程度の石が、右側壁では玄門より約1.8m、左側では、約1.3mの所で、直立した形で検出されており、約0.9~1.6mの所では、閉鎖石と考えられる石が3枚検出されている。これが入り口と考えられる。船は約0.45mである。天井石は確認されなかつたが、羨道部の石積上部で、厚さ10cm程度の石が横長におかれているのが確認されており、この上に天井石がおかれた可能性もある。高さは約1m程度であろう。羨道の側壁は一部玄室に入りこむ形で玄門を形づくっている。

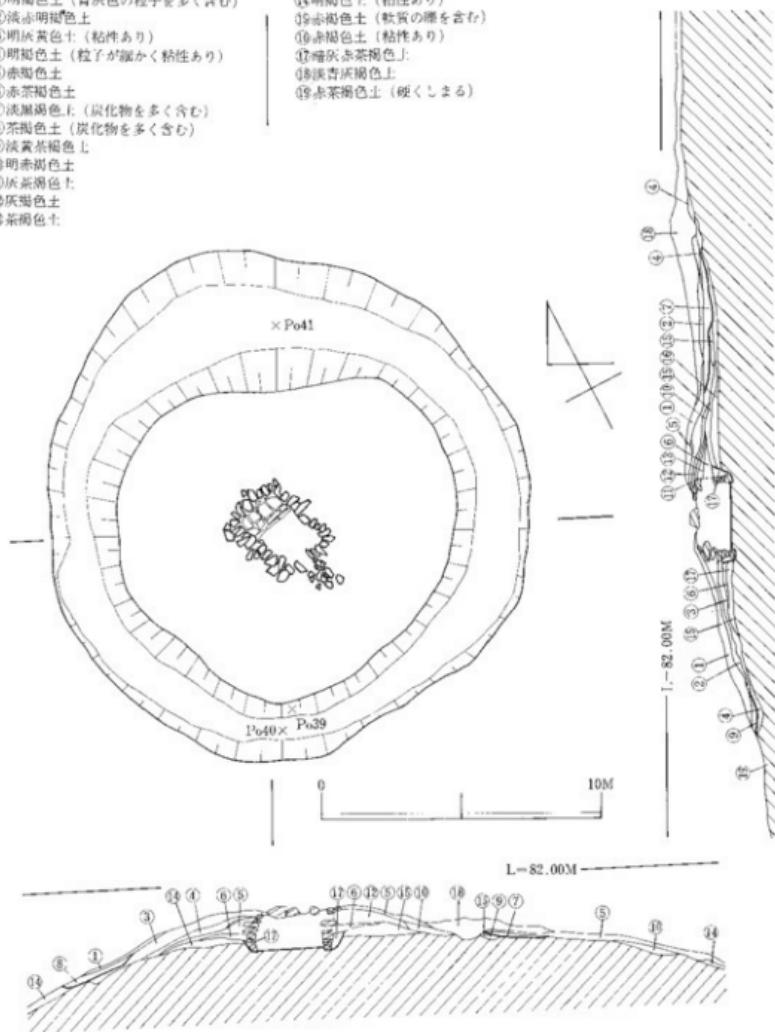
後室では、奥壁に向って右側壁際に、須恵器蓋環(Po1と2)、鉄鍔の柄(F3-6)、刀子(F7~8)、鉄斧(F9)があり、左側壁側には、有蓋高杯の蓋(Po3と5)と、有蓋



第34図 円護寺27号墳現況実測図

高環の环 (Po 4)、蓋環身 (Po 6)、及び碧玉製管玉 (J 6) が置かれている。前室では、左側壁際に高環 (Po22、23、24) がおかれ、玄門付近に蓋環身 (Po11) が伏せた形でおかれ

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ①朝褐色土 (青灰色の粒子を多く含む) | ④朝褐色土 (粘性あり) |
| ②浅赤明褐色土 | ⑤赤褐色土 (軟質の様を含む) |
| ③明灰黄色土 (粘性あり) | ⑥赤褐色土 (粘性あり) |
| ④明褐色土 (粒子が細かく粘性あり) | ⑦暗灰赤茶褐色土 |
| ⑤赤褐色土 | ⑧深青赤褐色土 |
| ⑥赤茶褐色土 | ⑨赤茶褐色土 (堅くしまる) |
| ⑦淡褐色土 (炭化物を多く含む) | |
| ⑧茶褐色土 (炭化物を多く含む) | |
| ⑨淡黄茶褐色土 | |
| ⑩明赤褐色土 | |
| ⑪灰褐色土 | |
| ⑫灰褐色土 | |
| ⑬茶褐色土 | |



第35図 円護寺27号墳遺構図

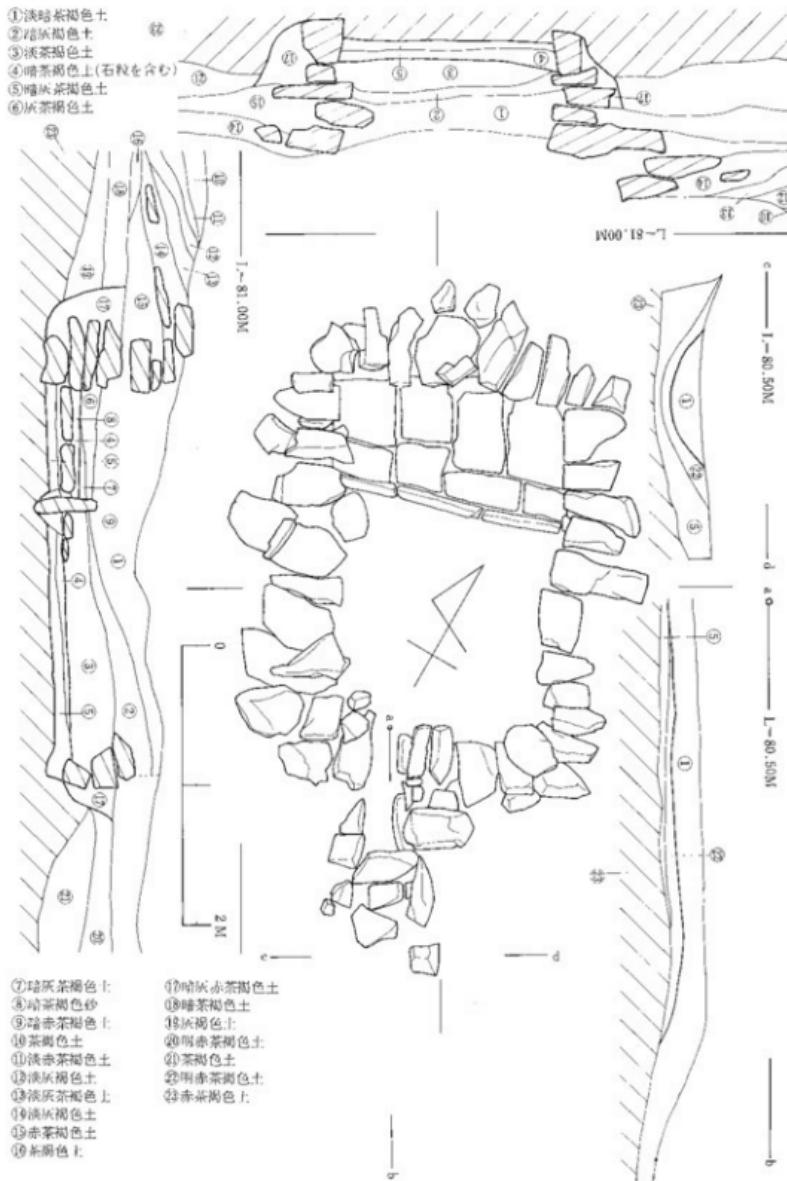
ている。右側壁際には、仕切りに近い所で蓋壺身（Po11）、鉄鏃（F1と2）、碧玉製管玉（J1～4）、滑石製管玉（J5）、水晶製切小玉（J7）、藍色のガラス製小玉（J8～11）と有蓋の壺の破片（Po33）がおかれ、やや中央部よりに埴蓋（Po30と32）が重なって検出されている。玄門よりには有蓋高壺（Po12と13、Po14と15、Po16と17）、有蓋高壺の壺（Po18）、蓋壺蓋（Po9）がおかれ、Po18の上に提瓶（Po28）が重なる。またPo9とPo17の上に、高壺（Po25）がのり、さらにその直上には、大型の有蓋高壺の蓋（Po19）が重ねられている。Po12の上には隙（Po26）がおかれ、有蓋の壺（Po29）がPo16にのった形で検出されている。また、土師器の小型壺（Po37）と甕（Po38）は、Po9、13、17を右側壁との間にはさむ形でおかれている。玄門右側では、蓋壺（Po7と8）を下にして、隙（Po28）と高壺（Po24）が重ねられている。大型の有蓋高壺の壺（Po20）及び無蓋の壺（Po29）が、土師器甕Po38の肩にかかる形でおかれている他、やや中よりに横瓶（Po34）が検出されている。また玄室中央部辺りには、ガラス製小玉（J12～15）が検出されている。J12、13

は藍色、J14は淡緑色、J15は淡青色を呈している。狭道部では、閉塞石の外側に、甕が2個体（Po35とPo36）検出されているが、両者とも底部の一部を欠き、Po35がPo36の上に重なる形となっている。他に、埴丘北側の周溝内より、高壺Po21の脚部及び蓋壺身の破片（Po39と40）が検出され、埴丘南側周溝内より甕の口縁部（Po41）が検出されている。

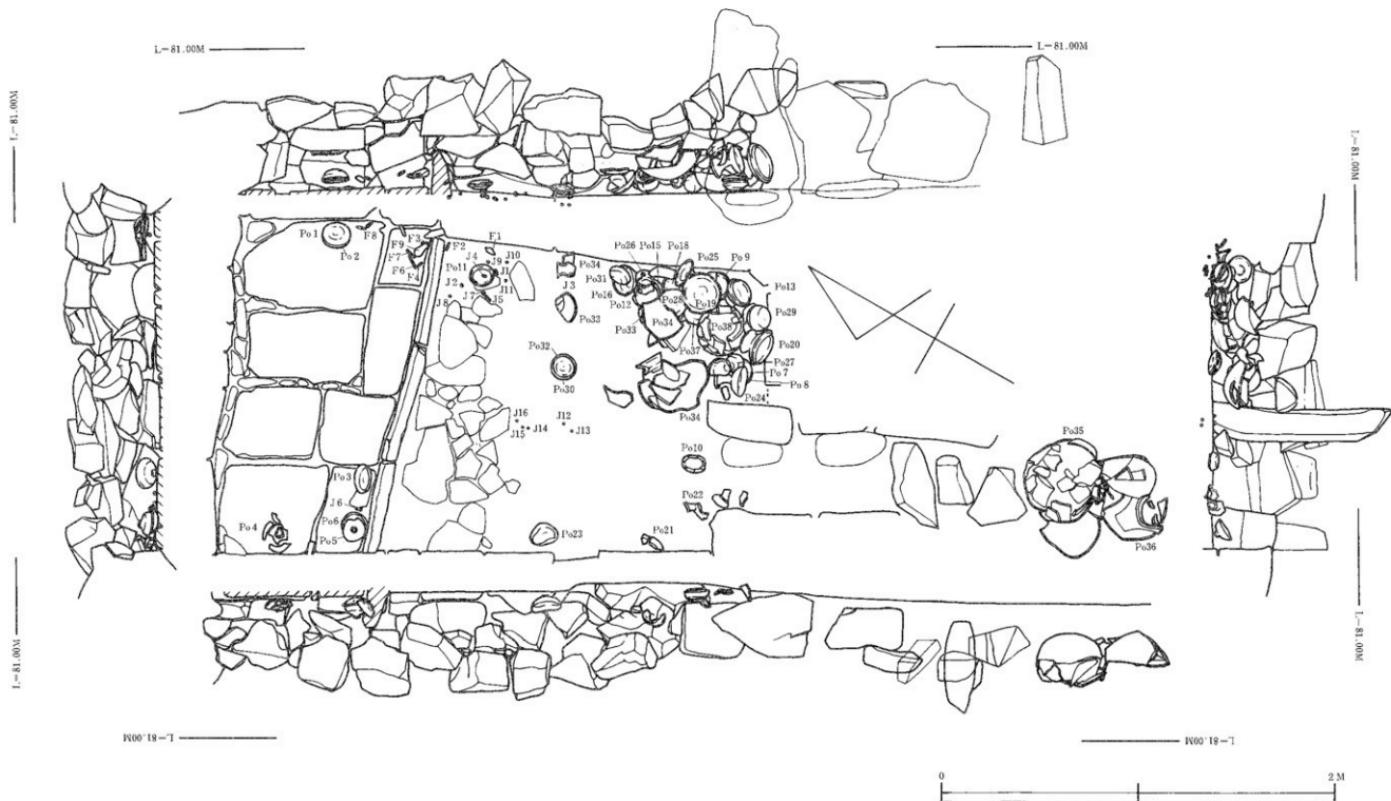
出土した遺物は、大きく3つのグループにわけられる。1つは後室左側に見られる有蓋高壺と蓋壺、及び前室



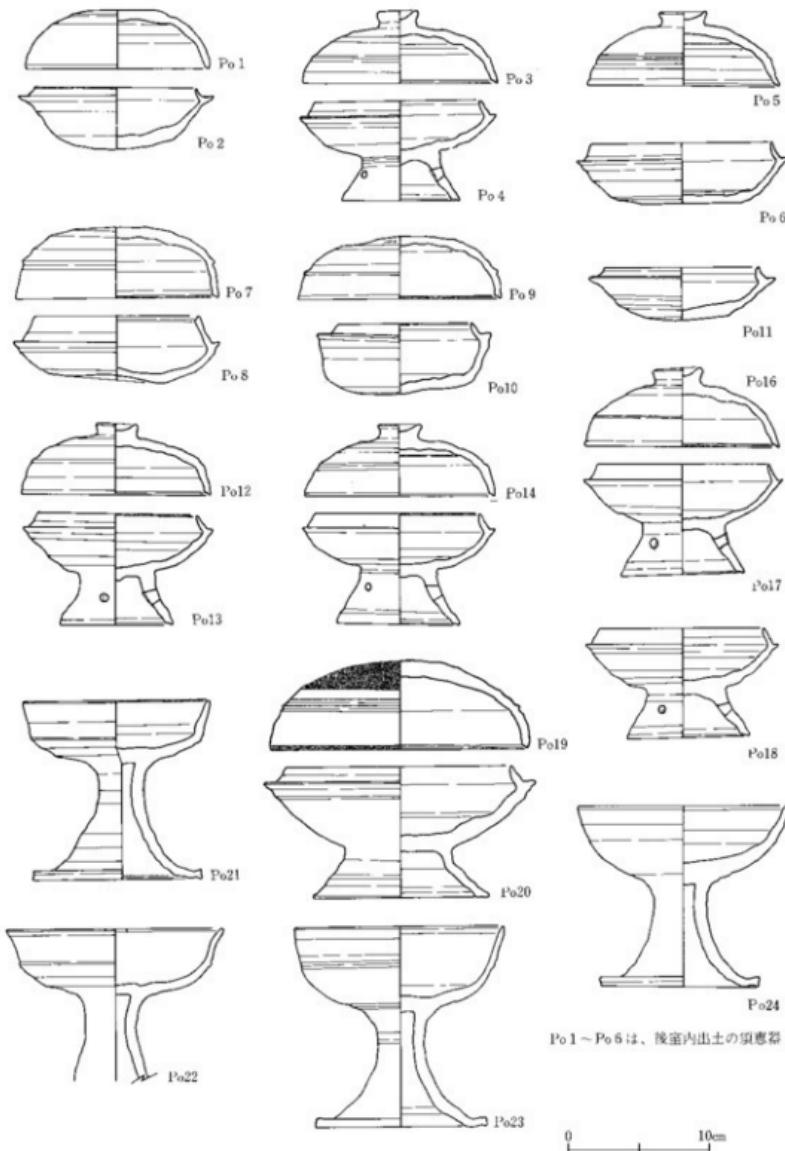
第36図 円護寺27号墳埋葬施設上部石積出土状況



第37図 円護寺27号墳埋葬施設構造図 ($S=1/4$)



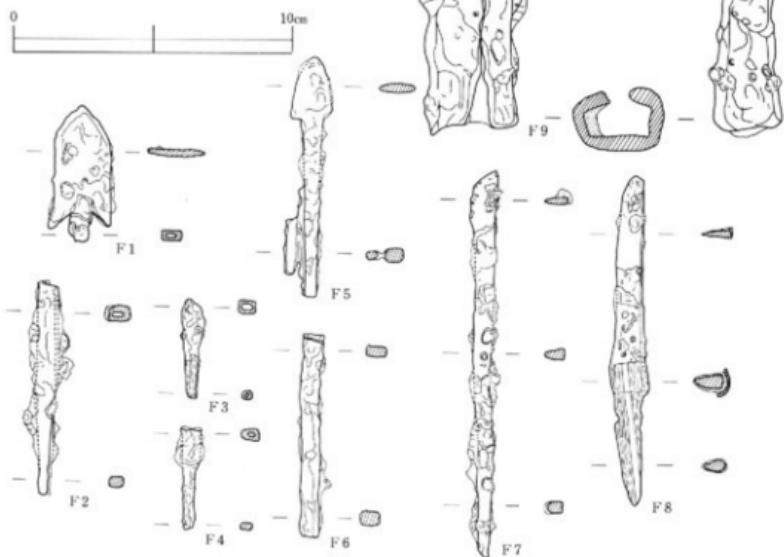
第38図 円護寺27号墳埋葬施設展開図



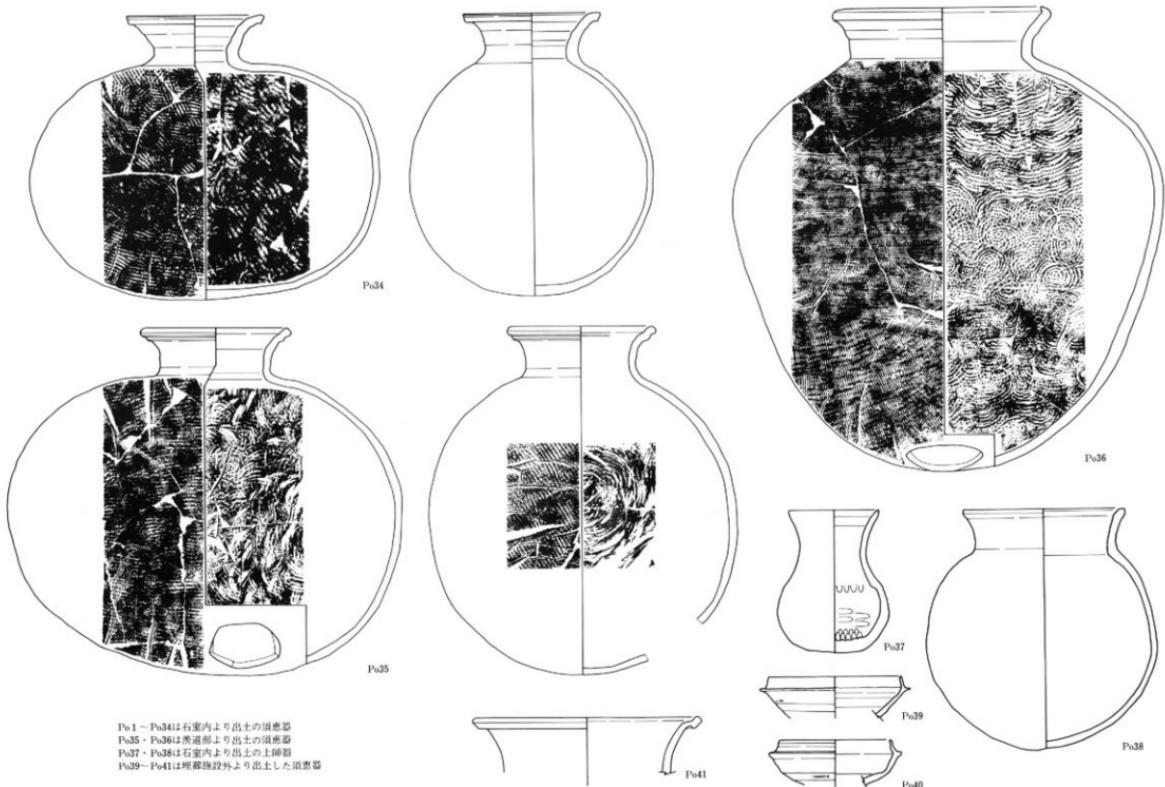
第39図 円護寺27号墳埋葬施設出土遺物その1



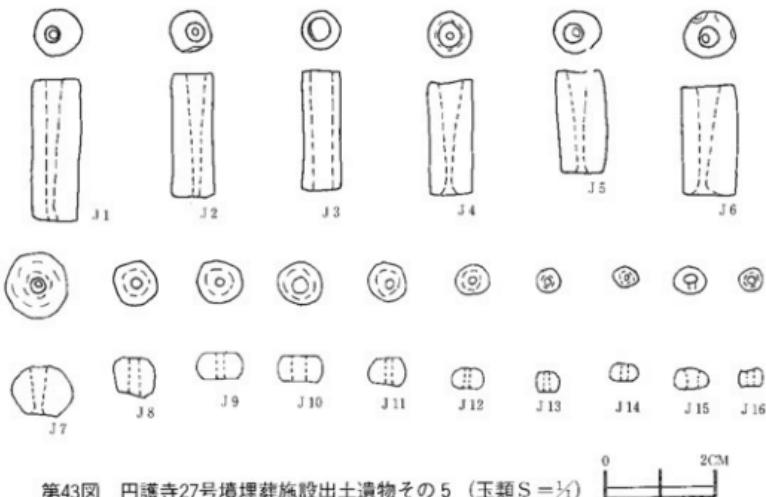
第40図 円護寺27号埴埋葬施設出土遺物



第41図 円護寺27号埴埋葬施設出土遺物その3(鉄器)



第42図 円護寺27号墳埋葬施設出土遺物その4



第43図 円護寺27号墳埋葬施設出土遺物その5 (玉類S=1/4)

右側壁玄門よりの積み重ねられた有蓋高坏 (Po12~18) と蓋坏蓋 (Po9)、蓋坏 (Po7と8)、鰐 (Po26) のグループ、1つは後室右側の蓋坏 (Po1と2) と、前室右側壁際の有蓋高坏等の上部におかれている高坏 (Po25)、大径の有蓋高坏 (Po19、20)、鰐 (Po27)、高坏 (Po24)、塊 (Po29) 有蓋の塊 (Po30と31、Po32と33) のグループ、1つは前室仕切り近くの蓋坏身 (Po11)、提瓶、玄門の蓋坏蓋 (Po10)、左側壁際の高坏 (Po21~23)、及び横瓶のグループである。第1のグループは、古い型式を残すもので、6世紀前半頃 (陶邑IIの1~2)、第2グループは6世紀後半頃 (陶邑IIの4前後)、第3のグループは、6世紀末~7世紀前半 (陶邑IIの5~6) のものと考えられる。

以上のことより、この横穴式石室の築造時期は、6世紀前半であり、7世紀頃までの間に、3回程度の埋葬が行なわれたものと考えられる。

円護寺28号墳

円護寺字庵の城の最高所（標高60m）にあり、円護寺18号墳（前方後円墳）より西北西へ延びる棱線末端部に孤立丘状にある地形の最高所に位置している、28号墳の北西100mには21号墳（標高45m）があり、東南東60mには23・24・25号墳（標高57m）が位置している。

円護寺28号墳は、その地理的要因の為か中世に人为的に上地改変されており、その原形を全くとどめていない。トレンチ法により確認された古墳は道径12.5mの真円に近い円墳である。周溝巾は東部で狭く（110cm）明瞭であるが西部の巾は古墳築造前の斜面に連続するので明瞭でなく、土壙の構築されていない北西部で最大290cmを測る事が出来る。

墳丘内の古墳期遺物の表探は無いが、西半部周溝内より2片の須恵器片が検出された。この須恵器片は共に同種の壺の部であるが実測不可能である。この他に古墳期を示す遺物が無いので古墳築造時期を判断する事は危険だが、須恵器片の外面が平行叩目、内面が青海波である事より古墳時代後期後半以降の築造と考えて良いと思う。

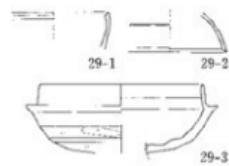
円護寺29号墳

円護寺18号墳（標高約100m）より西北西へ延びる緩やかな棱線を150m下り標高71mに位置する円墳である。これより西南西へ110m下ると23・24・25号墳があり、前方後円墳の隣りにある19号墳且また21・28号墳の位置を見ると、その各古墳間の間隔は19-29（120m）、29-23・24・25（110m）、23・24・25-28（60m）、28-21（100m）となっている。

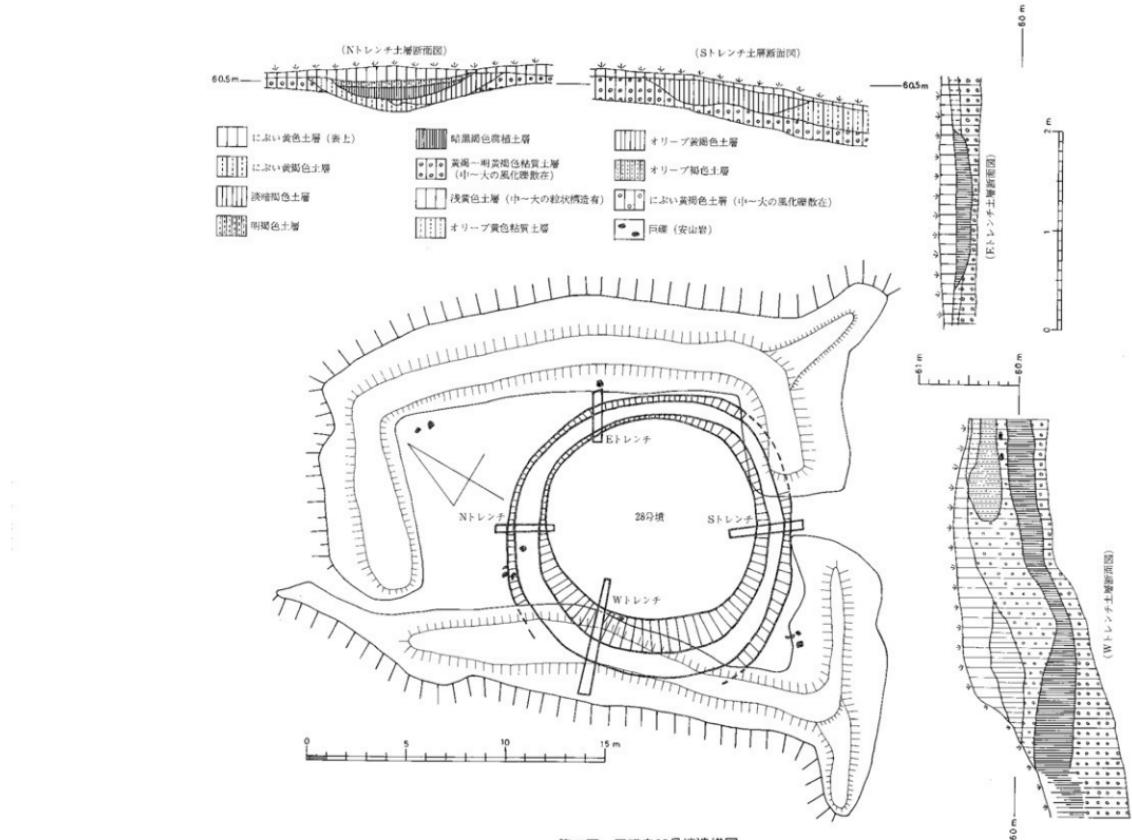
円護寺29号墳は半弧状の周溝を東半部（山寄り）有する円墳と判断され、その規模は径約14mを測る。周溝は東部に浅く北部に深いがその巾は約250cmと一定している。北部周溝内に長径5m、短径2mの長椭円形の落ち込みを認めたが、土壙としては大き過ぎ、遺物も出土していない性格不明な落込みである。

この古墳も19号墳同様に戦後間もなくの開墾により破壊され、墳丘の大半は削平されている。遺物は東部周溝内より須恵器片4点が検出され3点を実測出来た。

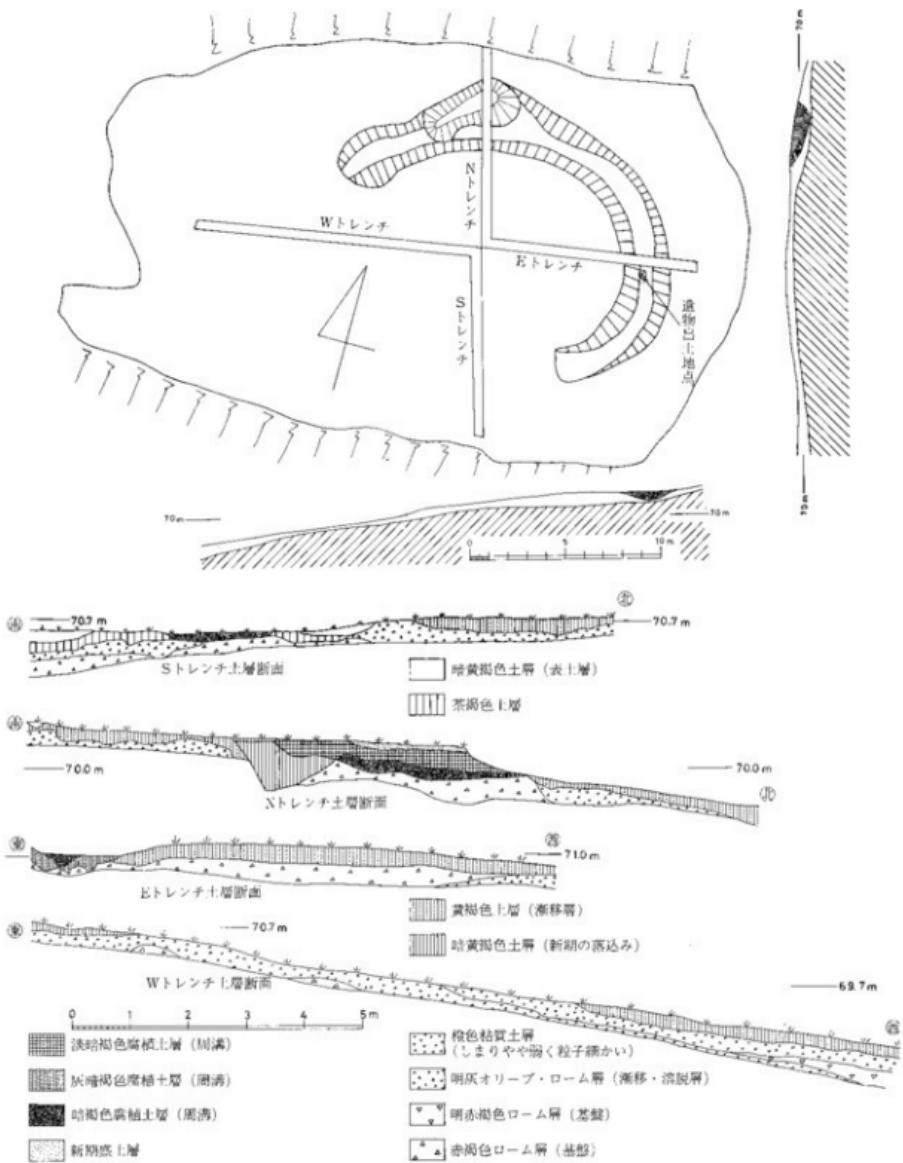
遺物29-1は広口壺の口縁部であり、29-2は壺蓋である。実測出来なかった1点も壺蓋であり口縁上部に鋭い棱を有する蓋である。遺物29-3は壺身であり体底部に難な回転ヘラケズリが認められ、口縁部の立あがりはやや高く端部は丸味があり口径11.6cmを測る。以上より29号墳の築造時期を古墳時代後期前半、六世紀前半と考える。



第44図
円護寺29号墳遺物実測図



第45図 円護寺28号墳造構図

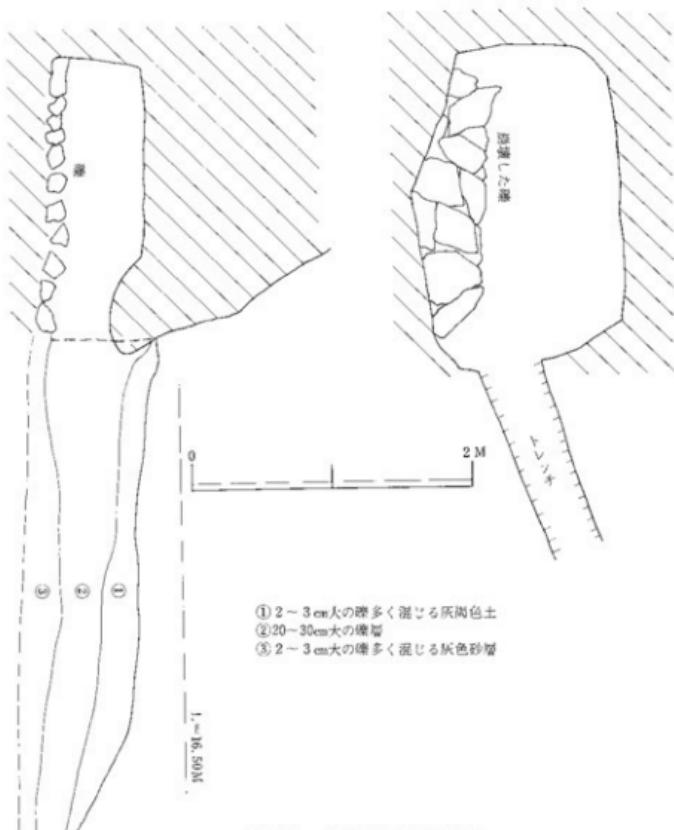


第46図 円護寺29号墳遺構図

円護寺横穴

円護寺4号墳のある尾根、字中尾の西下に鳥取県遺跡地図に載る円護寺横穴がある。しかし、地元の人の話によれば、このあたりは石切り場として利用されており、その跡ではないかという話である。この横穴の左右には石をとった跡が崖として残っている。

調査は、開口している部分が狭く中へ入ることができないので、横穴の口から地形に沿い1本のトレンチを入れ、断面観察を行うとともに、内部への通路とした。トレンチ調査の結果、石切りの際に出た礫が、厚さ80cmくらい堆積していることがわかった。トレンチから遺物は出土しなかった。横穴内を観察すると、底には10~20cmほどの角礫があり、底



第47図 円護寺横穴実測図

全体をおおっている。入口より左側は崩壊しており、礫が積まれたようになっている。右側は崩壊しておらず、側壁はほぼ直立しており、天井はほぼ平担であることがわかる。しかし、それは石の自然なはく離面である。遺物は全くみつからなかった。以上の結果、形態や遺物のないことを考えて、この横穴は古墳時代の墓としての横穴ではないと判断した。

小 括

今回調査した古墳は13基で、うち3基は古墳でなかった。そのうち、7基が今回の調査で発見されたものである。そのため、発掘調査時は一つひとつの古墳の調査に追われたため、全体を考えることができなかつたが、発見された古墳の配置をみると、字上ノ平ルの円護寺18号墳（前方後円墳）を起点として、線的に続くように見える。円護寺古墳群は、18号墳から南西に続く13基の古墳群があり、その古墳群も線的につながっている。

このように考えると、今回調査した範囲では、22号墳が孤立しているように見えるし、また、19～29号墳間の距離がかなりあることなど、発見できなかつた古墳がまだあるものと予想される。第2図に見えるように、19号墳から22・23・24・25号墳の間は畠となっており、29号墳も現況からはとても古墳とは思えず、地元の人の話がなければ、発見することはできなかつただろう。すると、現在畠になっている部分にも、古墳の存在する可能性もある。

円護寺古墳群のような稜線に沿って連なる古墳を見る時、古墳相互の規模・築造時期（造営時期）・平面的距離等が重要な意味を持ってくるものと考えるが、その考察はまとめにゆきり、ここでは各古墳自体の墳丘築造方法及び埋葬施設等の相関々係について、気付いたことを列挙する。

まず19号墳であるが、墳丘築造前の旧地表に多量の炭片が散在している事である。この現象は海部村海土23・24号墳でも認められており、墳丘築造前に野焼様の作業（儀式）がなされたものと考えられる。

そして23号墳では葬送儀礼が二回行われた可能性がある事と第1埋葬施設の棺床に砂が敷かれていた事があげられる。後者の事例については、亀井熙人『郷土と科学』（1964）が鳥取市開地谷古墳小群の中の6・10・12号墳の棺床に海砂が薄く敷かれている事を指摘しているが、葬送儀礼の風習として『吉事次第』に“次土砂ヲイル。引覆ノ上ニ、御カシラ、御胸、御足、此三所ニ当テ散ジル”と記されている事を斎藤忠『墳墓』（1978）は記述して、そのルーツが縄文時代の可能性がある事も暗示しており、棺床砂には注意を要する。

また23号墳に見られた小型箱式石棺にはその側壁の挟み方に2種類が認められ、機能も異なる可能性があるが、その配置状態も含めて埋葬の構造を究明する意義はあると思う。

第4章 碓跡

庵ノ城砦跡

庵ノ城砦跡は、円護寺の集落の北にある二つの尾根からなる字庵ノ城の東側の尾根にあり、尾根は北西に続き、その方向には千代川河口がある。尾根の頂は標高約61mで、ほぼ長方形に土壘をめぐらし、南側に入口としての虎口をもつ。土壘内部の郭部分はほぼ平坦である。江戸時代の史料である『旧堤さく覧』の、円護寺の連宮中に「庵ノ上ノ要害」が見え、この砦跡をさすと考えられる。『旧堤さく覧』によれば、この砦跡は、羽柴秀吉による鳥取城攻団網のうち、垣屋播磨守の陣の一部である。

○ 郭

南北約22m、東西約15mの規模を持つ削平地である。面積約300m²。地元の人の話によれば、この郭部分にはかつて桜があり、春には花見の場所となり、また子供たちが遊び場として使っていたということである。

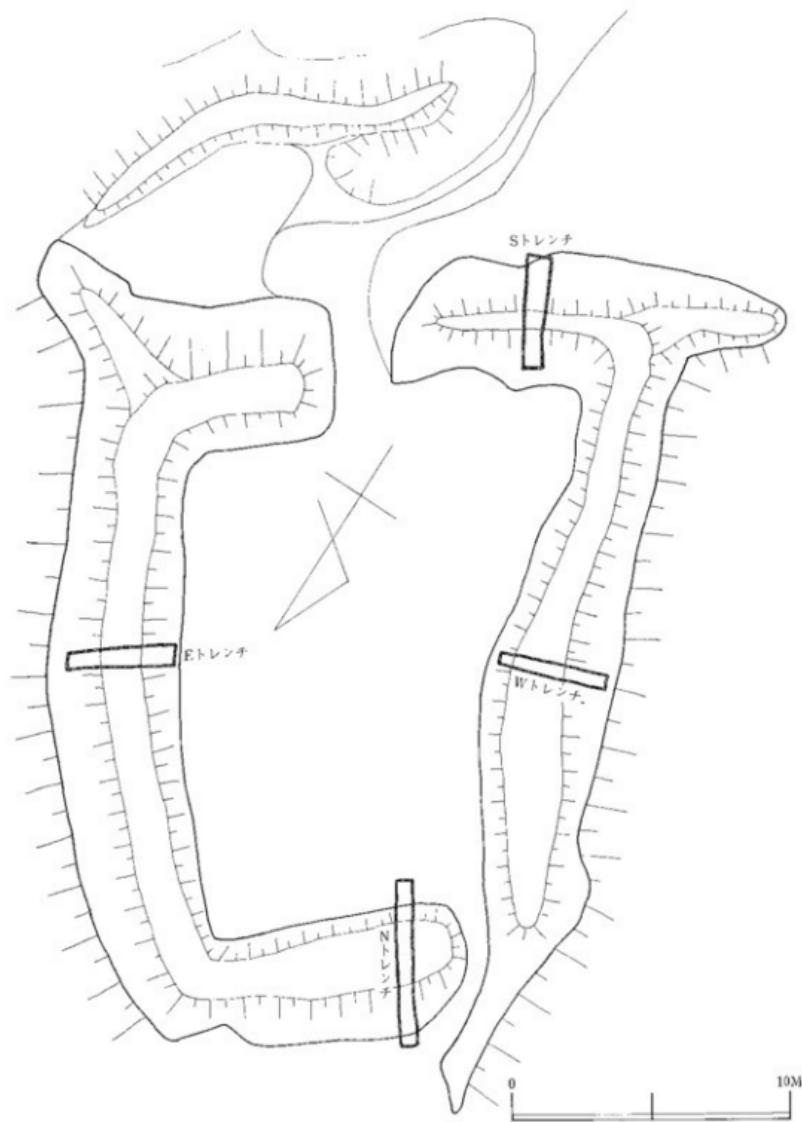
北側はややせまくなつておらず、地形に沿つて削平されていることを予想させる。四方を土壘がめぐるが、とりわけ南側は顯著で、郭よりも1.8mも高く積んでいる。しかし、北側は、ほとんど郭と同じ高さである。南側中央に虎口があり、また北側は両サイドが低くなつており、尾根の下に降りる通路のようになっている。この通路が、土壘を作った時点のものか、後にできたのかは、先に書いたように後世にもかなり利用されているため断定できぬが、尾根下方にも小さいながら平坦面が作られており、当初からこの通路はあったものと考える。

調査はまず全体を清掃し、郭内東側に巾3mの縦断トレンチを入れ、郭内に建物跡等の痕跡がないかを確認した。その結果、表土の下層は風化礫を多く含む黄褐色層の地山であり、その面でピット等の砦跡に伴う建物跡・櫓台跡らしい遺構は検出されなかつた。しかし、灰褐色の層が溝状に続くのが見られたので、古墳の周溝の可能性を考え、郭内全域の表土を除去した。溝状の灰褐色土は、円形にめぐり、古墳の周溝（円護寺28号墳）であることがわかつた。砦は古墳をこわして平坦面を作り出していることになる。全面の表土を除去したが、他にピット等はみられず、郭内の遺構はなかつたものと思われる。遺物は、寛永通宝1点を検出した。

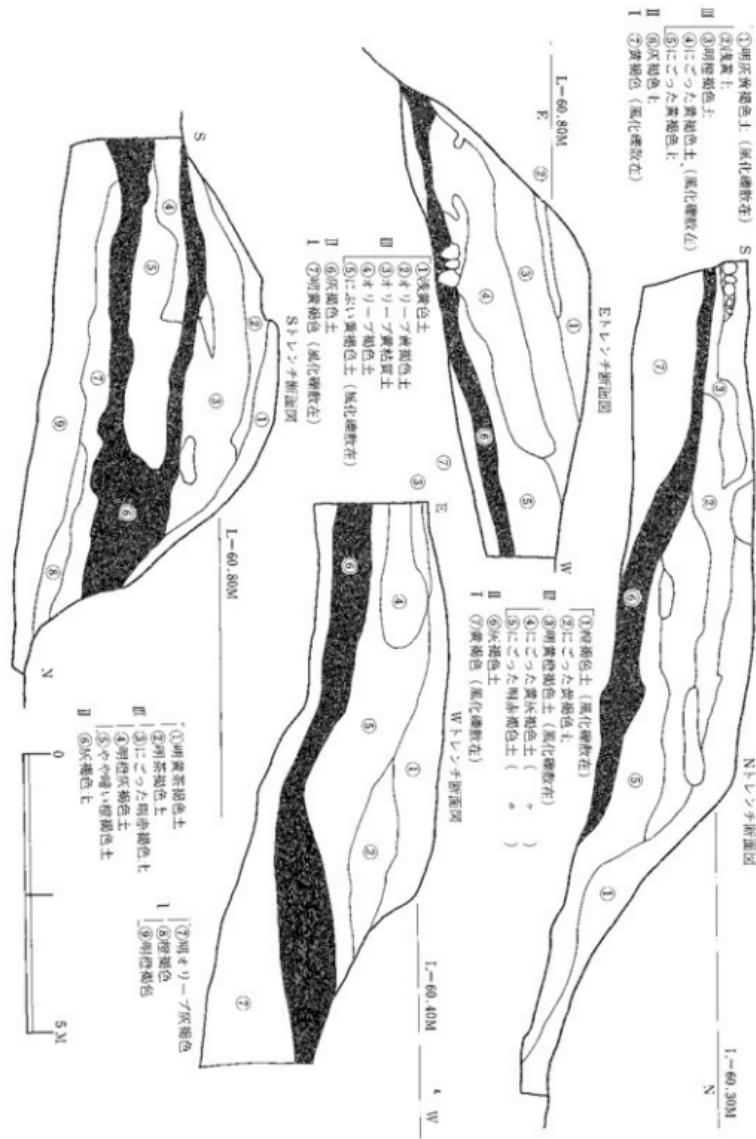
次に、土壘部分に東西南北4本のトレンチを入れ、築造方法を調査した。その結果、土壘の層序は、下層から風化礫を多く含む黄褐色層（Ⅰ層）、旧地表層（Ⅱ層）、盛土層（Ⅲ層）となり、28号墳の周溝がきわめて浅くしか遺存していないこと、Sトレンチで地山のⅠ層がかなり削かれていることから、尾根中央部のかなりの土量を削平し、周囲に盛土してい



第48図 庵ノ城現況実測図



第49図 庫ノ城砦跡遺構図・トレーンチ配置図



第50図 庵ノ城土塁トレンチ断面図

ることがわかる。

◎ 尾根下方へ向かう遺構

郭部分より北西にのびる尾根は、階段状に小さなテラス状の地形をもっており、円護寺21号墳のあるあたりまでその地形が続いている。そのあとはかなり急激にこう配がきつくなり、それより下方には遺構がないものと思われる。この尾根には、21号墳検出の際、他に古墳がないかどうか確認のため、尾根に沿って1m×50cmのトレンチを入れた。その際、断面に数ヶ所地山をカットして平坦面をつくりだしているところがあることがわかった。そのカット面をもとに、平面的に測量したものが第51図であるが、平坦面はいずれも南北4~5m、東西10m程度である。カットした土は、断面に盛土が見えないことから、周囲に盛土しているものと思われる。全体に雑な作りで、IH地形をできるだけ利用したという印象をうけ、平坦面も水平というわけではない。

また、郭南側にも郭より一段低い平坦面があり、その部分も多少の削平はおこなわれていたと思われる。

遺物は、尾根に沿っていれたトレンチの郭より北15m付近で、古銭12枚がまとまって出土し、また、郭すぐ南の平坦面で鉄鏃（かぶら矢）が出土した。

古銭は唐銭及び宋銭で、その初鋳年を列挙すると、

乾元重宝 758年

咸平元宝 998年

祥符通宝 1008年

天禧通宝 1017年

皇宋通宝 1039年

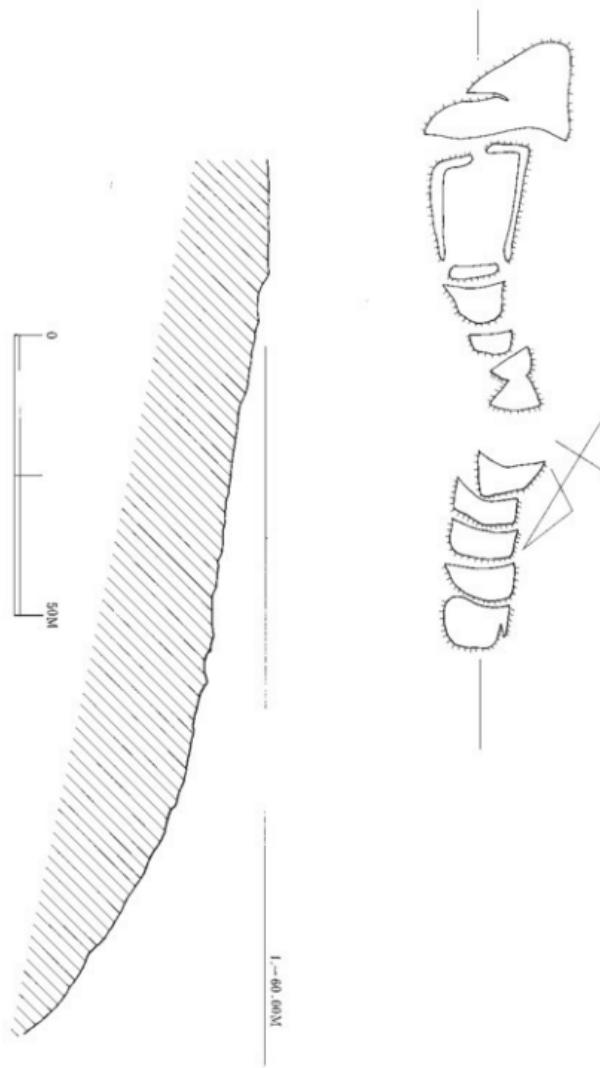
元豊通宝 1078年

元祐通宝 1086年

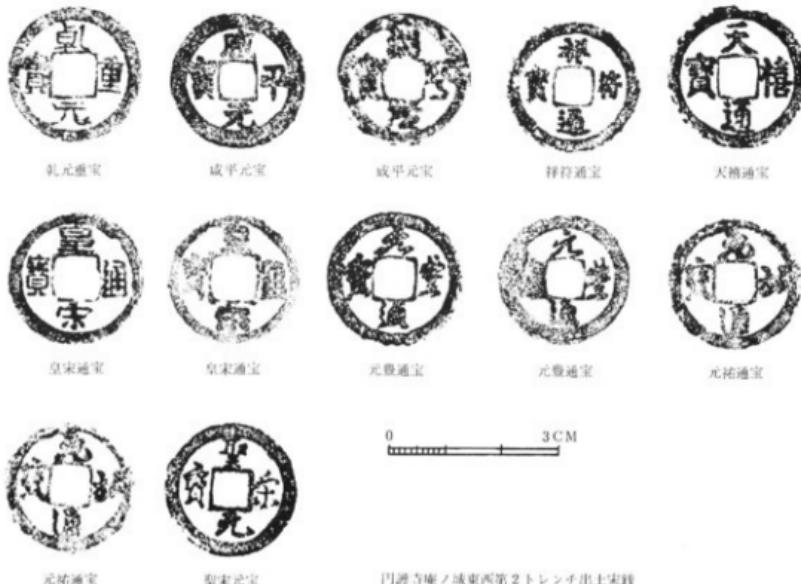
聖宋通宝 1101年

で、時代的にもまとまっており、砦跡に付随するものとは考えがたい。発見時は、和紙状のものが古銭の間にあっており、紙につつまれていたものと思われる。六文銭が2組で出土したのかもしれないと考え、出土地点の周辺の表土を除去したが、土壌状の落ち込みは検出されず、土塙墓とは考えられない。

むしろ、船にかかる祭りで「船玉さん」と呼ばれる祭りがあり、それは、船の中心に供物をする祭りであるが、その供物の中に12枚の銭を入れる習慣があるということである。他にも12枚の銭を使った祭りがあろうが、そのような祭りに使われた古銭が、他の供物が土に帰した後も、土中に残ったのではないだろうか。古銭の時期から考えて、12~13世紀頃、そのような祭祀がこの地で行われたのであろう。古銭はこの他に、寛永通宝が一点出



第51図 麻ノ城跡構全体図



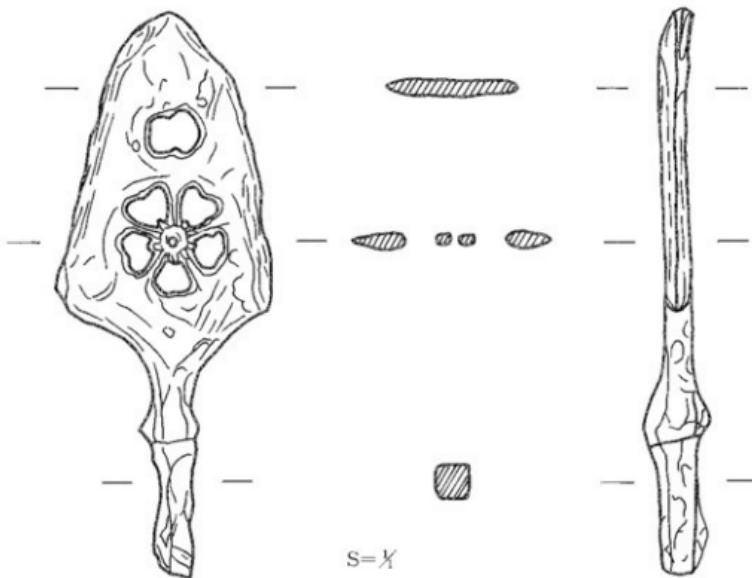
第52図の1 麂ノ城出土古銭拓本



第52図の2 麂ノ城出土古銭拓本

土している。

鉄鎌は、土中に埋まっている状態で発見されたが、錫びてはいるものの、かなり遺存状態がよく、内部に桜の花びら状のすかしがあることがわかった。そのすかしより先にも、もう一つのすかしがあるが、こちらのほうは不整形である。またなかごの部分に一段ふくらんでいる箇所があり、末端が欠けている。形態から、実戦的なものとしては考えられず、かぶら矢として使用されたものと推測される。時期はにわかに決めがたく類例を待ちたいが、古墳時代のものとは考えられず、砦跡付近で出土していることから、中世末と考えてもよいかもしれない。



第52図の3 庵ノ城出土遺物（鉄鎌）

『日暮さく覧』の円護寺の連營中の「庵ノ上ノ要害」が、庵ノ城砦跡にあたることは先に述べたが、図版30の絵図では、虎口のほかに上側（東側）に一つ口があき、左側（北側）の土壠も一部しか書かれていません。また、土壠下方（西側）に2本の線が見え、おそらく道と思われるが、はっきりとはわからない。筆者の岡島正義は、おそらくこの砦跡を実見して書いており、意識して絵図を書いていると思われる。すると、絵図と現在の姿とのギャップが何によるものかが問題になるが、それは今後の課題である。しかし、上側（東側）の開口している点は、現在見られず、かつて開いていた形跡もない。北側は土壠がかなり盛土を失っており、記述されなかったとも考えられる。北東すみも現在は下方への通路のようになって開いているが、かつては盛上があったのかもしれない。写本の誤写ということもあるかもしれない。

古屋敷砦跡

古屋敷砦跡は、庵ノ城砦跡の東側の、庵ノ城の尾根とほぼ平行して走る字古屋敷の尾根の頂にある。尾根の頂は標高約75mで、庵ノ城砦跡よりも14m程高い位置にある。見晴らしは非常によく、千代川河口・丸山が一望できる。『旧墨さく覽』にはこの付近に「上ノ平ノ要害」が載っているが、字名上ノ平ルはこの地のかなり上方になり、上ノ平ルには前方後円墳の墳丘上につくられた土壘があり、それが「上ノ平ノ要害」を示すものと思われ、この砦については記載がないようである。しかし、土壘がめぐっていることや、地形を考えれば、秀吉による鳥取城攻めの際につくられた砦跡としてまちがいはないと思われる。庵ノ城砦跡と同様に、垣屋播磨守の陣の一部であると考えられる。またこの地は「妙見」とも呼ばれ、昔妙見堂が立っていたと言われ、『因幡志』にも廃社となった妙見堂が記録に残っている。

◎ 郭

南北30m、東西15mの平坦地をもつが、庵ノ城の郭ほど平坦ではなく、全体に北、尾根方向に傾斜している。東側に一部高い部分があり、また郭中央部で少し傾斜が急になるところがあり、2段の郭になっている。土壘は南側で遺存が悪いが、その南側が虎口になることはまちがいない。南側はさらに土壘が30m程続き、その南のテラス状の部分につながる。その形は、1980年鳥取市教育委員会によって調査されたヒル山砦跡とよく似ており、上ノ平ルまでの連絡路となっていたのだろう。また虎口から南につづいて、参道状に石垣が數かれており、これは妙見堂があった時のものと思われる。

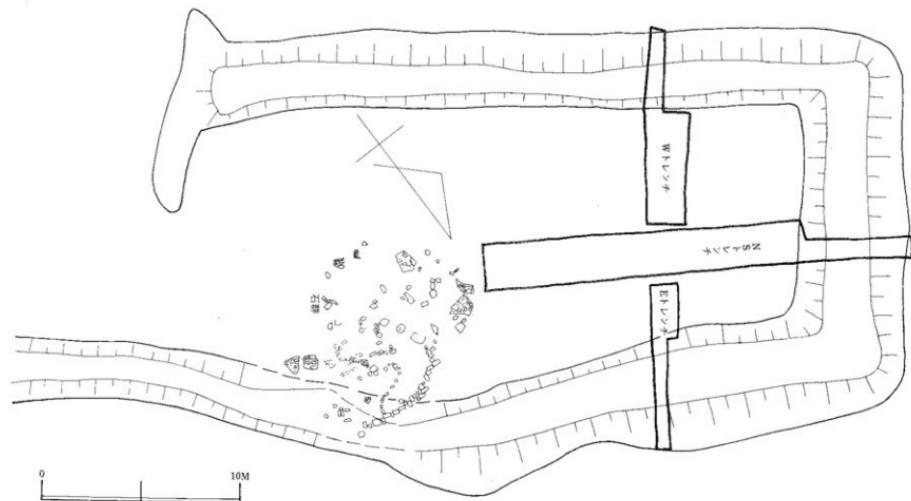
調査は、郭南側については、妙見堂の遺構が予想されたため、全面の表土を除去した。北側には、南北・東西方向に巾2mのトレンチを入れ、建物跡等の遺構を確認しようとしたが、遺構はみつからなかった。そして、トレンチを土壘部分に延長し、土壘の断面を観察した。その結果、庵ノ城土壘と同様に地山黄褐色層（Ⅰ層）、旧地表層（Ⅱ層）、盛土層（Ⅲ層）が確認され、尾根中央を削平し、それを周囲に盛っていることが明らかになった。庵ノ城では、下層から古墳の周溝を検出したが、古屋敷では検出されなかった。郭南側の妙見堂については後述するが、北側と同様、砦跡に伴うような遺構・遺物はみつからなかった。

◎ 土壘及び通路

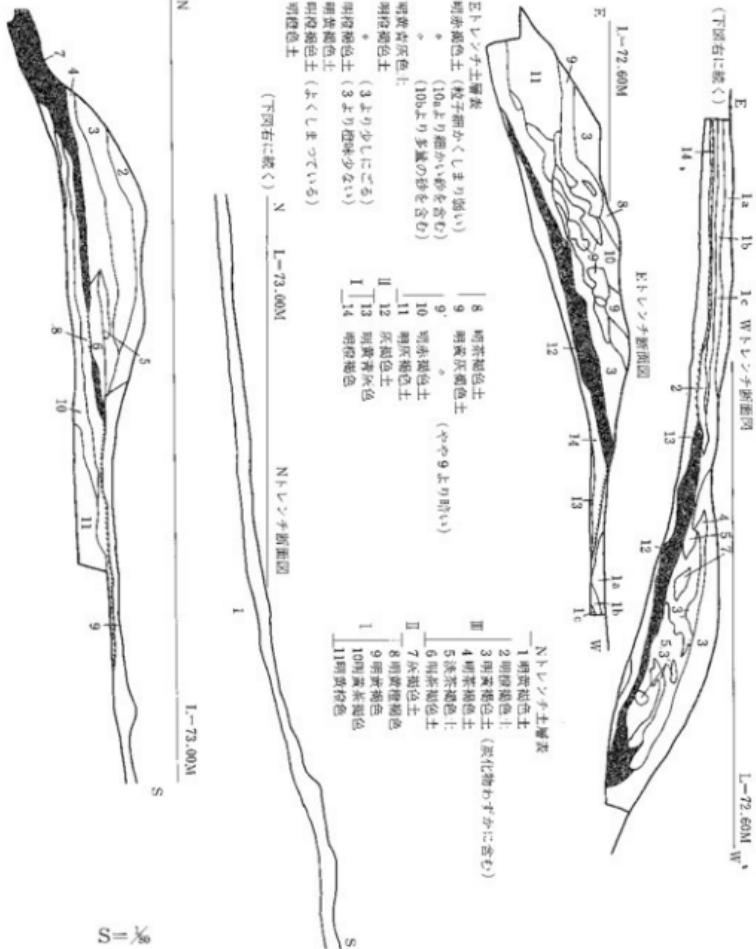
南側に郭から続く土壘があり、約30mにわたっている。そして、続く平坦面があらわれ土壘は消滅する。平坦面には土壘状のものはない。先の「ヒル山砦跡」では、土壘に沿って通路があるとしているが、古屋敷砦跡でも、通路としてよいと思われるものが土壘横に連なるが、それほどフラットな面ではない。この「通路」の方向に上ノ平ルがあり、その



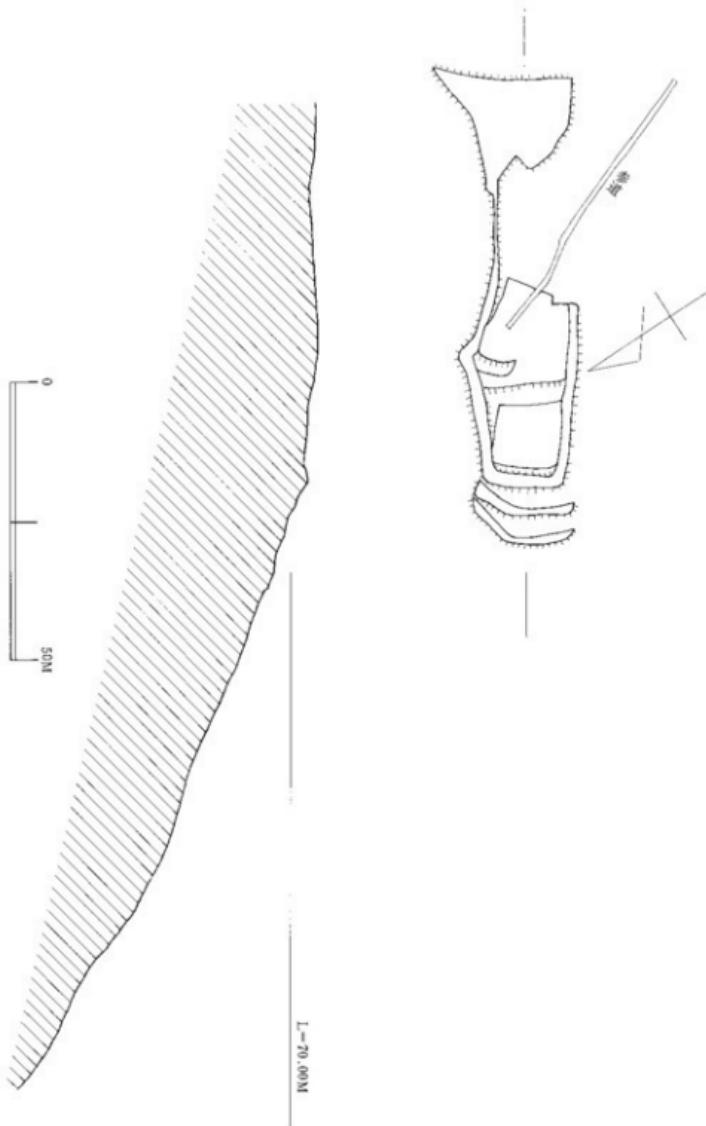
第53図 古屋敷跡現況実測図



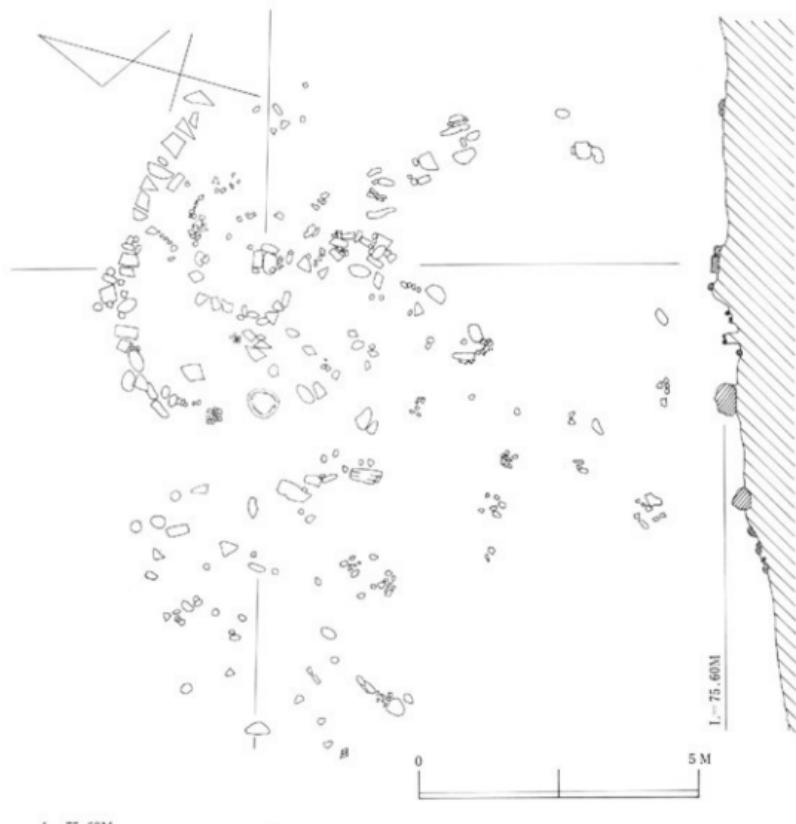
第54図 古屋敷跡遺構図



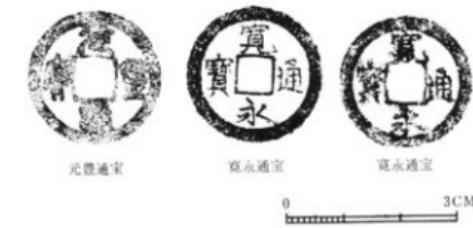
第55図 古屋敷土器トレンチ断面図



第56図 古屋敷跡構全体図



第57図 妙見集石実測図



第58図 古屋敷出土古錢拓本

先に垣屋播磨守陣所のおかれたとされる土俵場という地名がある。また「ヒル山砦跡」では、通路下に第2郭を検出しているが、古屋敷砦跡では、「通路」の高さ約7m下で、40m四方ほどのフラットな面があり、それも土壘にともなうものかもしれない。そのフラットな面は、円護寺22号墳の調査の際、一部バックホーで表土を除去したが、遺物・遺構は検出されなかった。

◎ 郭の前後の遺構

第72図の通り、古屋敷砦跡には、庵ノ城砦跡にみられたような、尾根の先端に向かって平坦面を作っているような箇所はみられない。一部起伏しているので、少しひらがた部分を図化して加えたが、それも非常に狭く、あまり意味があったとは思えない。これは、地形的に急斜面であるためと、谷の奥のほうに位置するために尾根前方に出る必要がなかったためではないだろうか。また、南側の土壘のつづきに平坦面がある。第72図ではそこで切れているように見えるが、実は現在の道が山を削っているために切れているので、当時はずっと上ノ平ルまで続いている可能性がある。図化した部分より南は、現在全て畠地となっており、段々畑が上ノ平まで続いている。

◎ 妙見堂及び参道

古屋敷砦跡の最も高いところに、地山からはでない、いわゆる円護寺石の石群が認められた。「因幡志」の円護寺村の記述中に、「妙見社（旧跡在山上）」とあり、円護寺に妙見堂があったことがわかる。そして、地元の人の話によれば、古屋敷砦跡の部分に「妙見さん」と呼ばれる堂が立っていたということである。そのため砦跡調査と並行して調査を行った。その石群の近辺には、石燈籠の破片多数が散乱しており、陶器片や素焼きの灯明皿等がみつかり、お堂の存在を裏づけている。散乱した石を除去し、精査すると、下層よりほぼ方形の石列が姿をあらわし、またその内側にもう一つの石列があることがわかった。また中央にも石が集中している。結局約5m四方の石列内に、約2m四方の石列があり、その中央に石がおかれるという、3段の構造になっている。方向はほぼ北向きで、妙見信仰が北斗信仰であることを考へれば、ここに立っていたのは妙見堂としてまちがいなかろう。しかし、ピット等は検出されず、礎石状のものも不明で、どういう建物が立っていたのかはわからないが、周辺で瓦は出土していないから、葺ぶきの小さな庵だったろうと推測される。

また第56図に記入した参道は、円護寺石を偏平に削り、石疊にして並べたものである。現在の円護寺の修復のために一部は掘りおこしたことであるが、かなりの部分が遺存している。

遺物は、先にのべた石燈籠、陶器（灯明皿か？）、素焼きの灯明皿の他に、古銭で元豊通宝、寛永通宝各1枚である。元豊通宝は庵ノ城でも出土している宋銭で、なぜここに落ち

ているのか不明である。それ以外の遺物は、いずれも近世のもので、中世にさかのぼるものはなかった。

『因幡志』の書かれた寛政年間に、すでにこの妙見堂はなくなっていることを考えれば、それほど村人に基盤をもっていた信仰とは考えがたく、むしろ一時的なものであったのかもしれない。祀る人がいなくなった時点で廃れていったのだろう。土壙等から考えて、妙見堂のできたのは近世初頭以前にはさかのばらず、また存続も江戸時代寛政年間を下らないと考えられる。『鳥取県史2中世』によれば、妙見信仰は、当初「大台・真言密教の加持祈祷の対象であったが」、のち日蓮宗にとり入れられ「あらゆる現世利益の祈祷対象」となった。円護寺の妙見信仰ならば、当然天台系になるであろうが、くわしいことはわからない。砦跡と妙見堂の関係が残されるが、今後の課題としたい。

中尾土壙

円護寺4号墳のある字中尾の尾根上に、長さ55mにわたって土壙が築かれている。土壙は、尾根の北側に作られ、南側はやや南に傾斜する平坦面となっている。土壙の遺存は東側ほど悪い。第59図のA-A'、B-B'、C-C'の3カ所にトレンチを入れ土層を観察したところ、尾根頂をカットして北側に盛土して土壙を作っていること、また南側にも盛土して緩斜面をつくりだしていることがわかった。土壙の切れる東側は一段高くなっている、尾根に平坦な面ではなく、それより東は旧地形をのこしている。

『旧墨さく覧』にこの土壙は見えないが、土壙をめぐらして郭を作っていないとも、尾根全体を削って平坦面を作っていることから、郭と同じような意味をもっていたものと思われる。また尾根先端の円護寺4号墳の墳丘が削平されており、権台が予想されたが、遺構はつかめなかった。

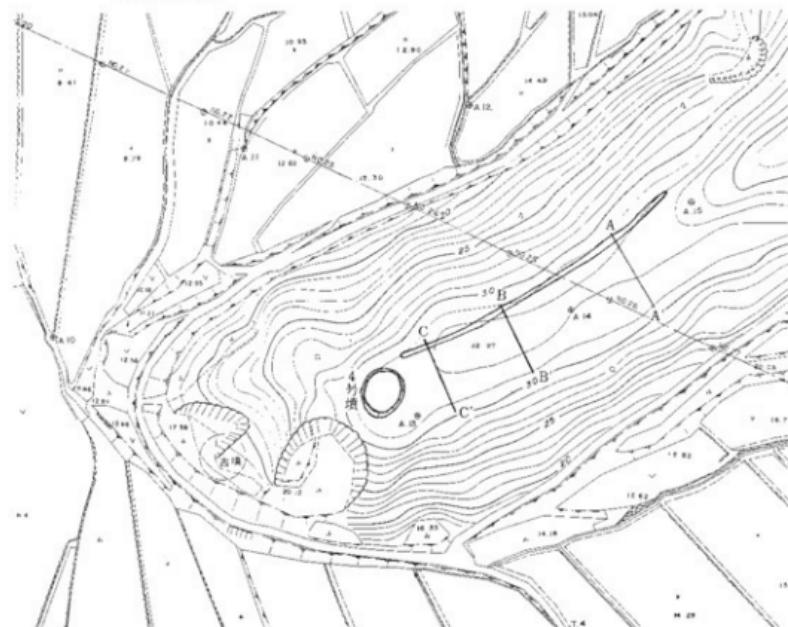
小 括

砦跡の調査は、3カ所行ったが、土壙の他にはこれといった遺構も検出されなかった。しかし、砦をつくること・土壙をつくることはかなりの土木工事であり、『旧墨さく覧』にとりあげられていない、土壙のみが直線的に走るような遺構にしても、中尾土壙のように、尾根全体をカットして平坦面を作りだしていることがわかった。戦争がこのような土木工事を伴っているということは、歴史を見る際の一つの新しい視点ではなかろうか。

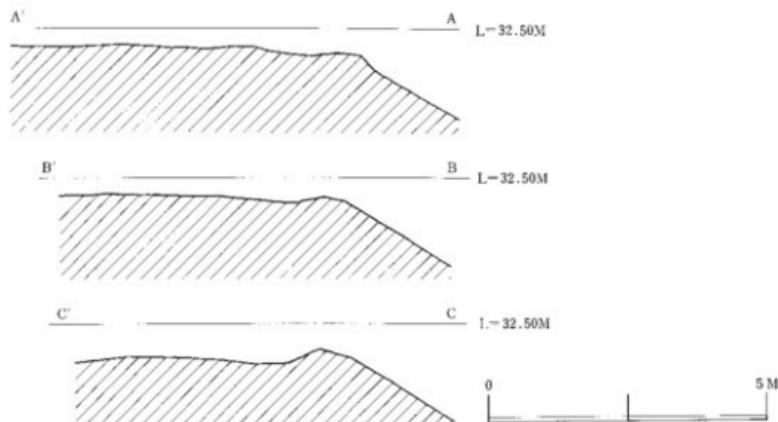
砦跡の調査に関して、山根幸恵鳥取県立博物館館長には、貴重な助言をいただいた。また、福井淳人同博物館学芸員には、『旧墨さく覧』の閲覧・掲載を快く許可していただいた。深く感謝いたします。

〈参考文献〉鳥取県史2中世

陰德太平記



第59図 中尾土壘遺構図



第60図 中尾土壌断面図

第5章 建物跡・テラス地形

古屋敷第1テラス

円護寺字古屋敷内には、明らかに人為的に平坦面を作りだしたと思われるテラス状の地形が何カ所かあり、字名の古屋敷と合わせて、この地に屋敷跡があることが予想された。まず、我々が古屋敷第1テラスと呼んだ一番広いテラスにトレンチを入れた。そこで、礎石と思われる集石を検出し、また、井戸・石組み状の集石遺構の存在を周辺の清掃によって確認した。そのため、テラスの平面全域を掘り下げ、調査することにした。

調査によって検出した遺構は、礎石と思われるもの3カ所、井戸1基、石組み状集石遺構1基、土留めと思われる石列1、便所と思われる土塙1である。遺物は、瓦・陶器片・焼け鉢破片・古銭（寛永通宝）を採集したが、中世以前の遺物はみられず、この場所に建物が立っていたことは確実だが、それは近世以降のものと考えられる。

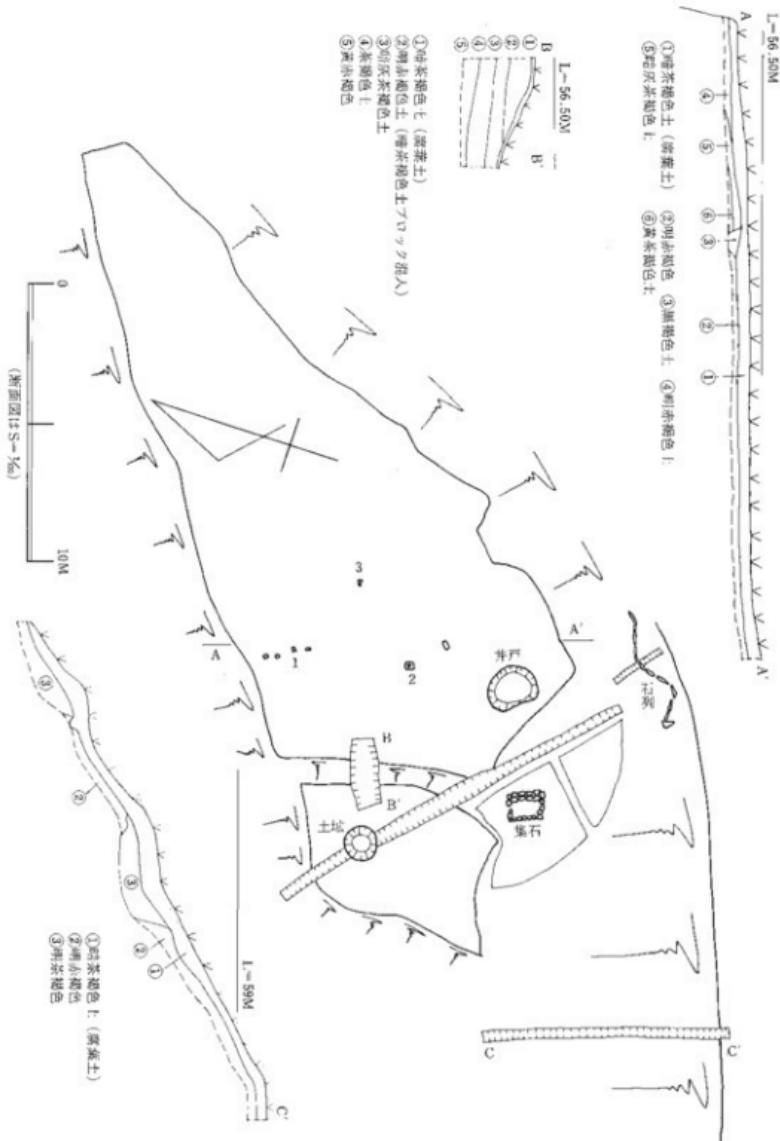
テラスの築造は、第61図のA-A'、B-B'の断面から、南側を削り、それを北側に盛っていることがわかる。暗灰褐色土層が旧地表と考えられ、その上に明赤褐色土をのせている。しかし、盛土でつくりだした面積はそう広くなく、削りだしてつくった部分の面積が広い。第1テラスのテラス部分は、長方形でなく、東側ほどせまくなってしまっており、後述の礎石とあわせ、どのような方向で、どれほどの建物が立っていたのかは不明である。

また、C-C'の断面にも、斜面を一部分削平した形跡があり、旧道と考えられる。土塙のあるテラス、その西側のテラスとテラス状の地形が続き、屋敷地の範囲はきめがたい。

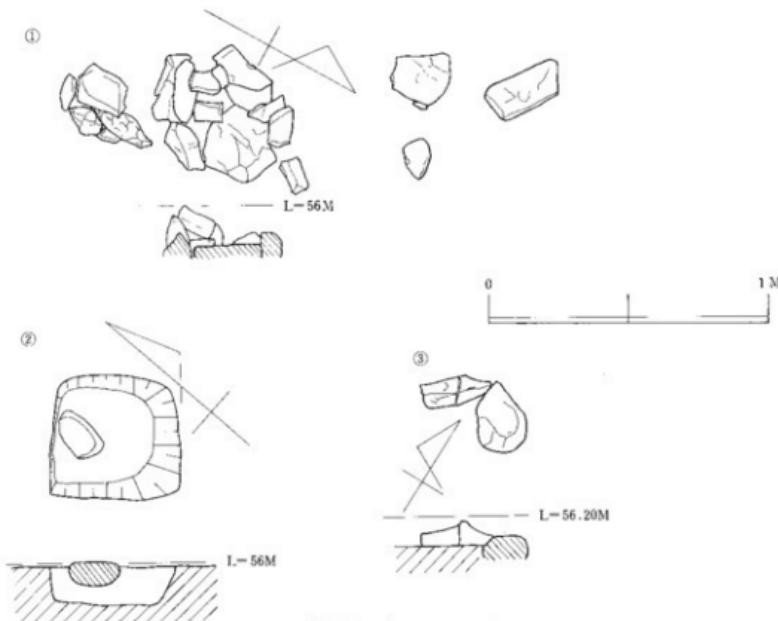
◎ 磊石

礎石らしいものは3カ所あるが、1は底に平坦な石を置き、その上に立つ柱を支えるように他の石でまわりを囲んでいる。その付近に丸瓦があり、出土状況からして、近年廃棄されたものとは考えがたく、この建物の屋敷にのっていたものと思われる。しかし、瓦は他に出土していない。2は、ピット中に少し偏平な河原石を置いたもので、小さいながらその石の上に柱が立っていたと思われる。3は、2つの石によって作られているが、2つの石を直角に組み、その間に柱を置き固定したのではないかと思われる。その他平たい石が単独でいくつか検出されているが、それも礎石として利用された可能性がある。石はいずれも河原石で、地山内にある石と異なり、それらが人為的なものであることはまちがいない。

テラス上に巨木があり、その根を除去することができず、全面を調査できなかったのは残念である。礎石の配置を考えたが、明確な建物のプランはわからなかった。以上にピット等は全く検出されなかった。



第61図 古屋敷第1テラス造構配置図



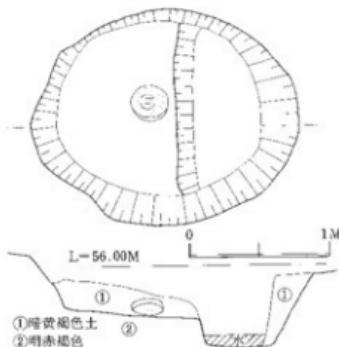
第62図 第1テラス礫石図

◎ 井戸

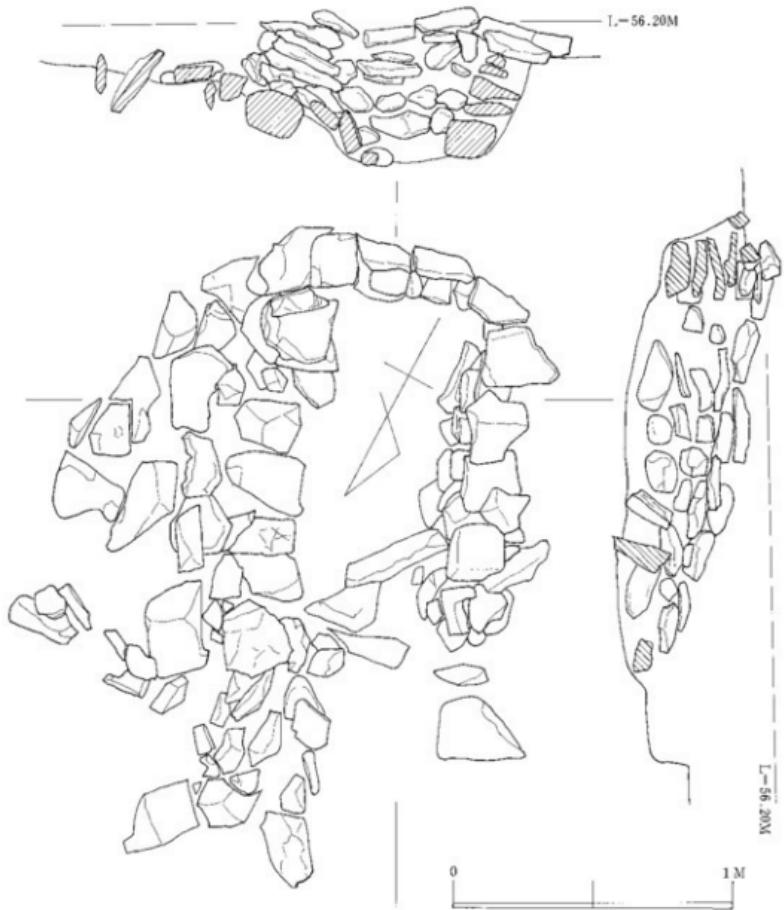
第1テラス南に、現在でも水の湧いている井戸があり、清掃して調査した。このテラスの東側にも自然に湧水する箇所があり、谷の湧水を井戸として利用したものと考えられる。井戸はほぼ円形で、枠等の残存は認められず、当時も素掘りで使用していたと思われる。円形の中は2段になっており、その高い部分に、円盤状の石製品が出土した。その部分ももとは井戸の一部あとで土砂が堆積したのかもしれないが、その石製品を当時のものと考えると、やはり2段になっていたのだろう。その高い方に人が入り、水を汲んでいたと考えるほうが妥当かもしれない。

◎ 集石遺構

井戸のすぐ南に、20cm大の礫を使った石組みがある。石はほぼ偏平なものが多く使われ、硬い石である。軟質の円護寺石でない。ほぼ長方形に石



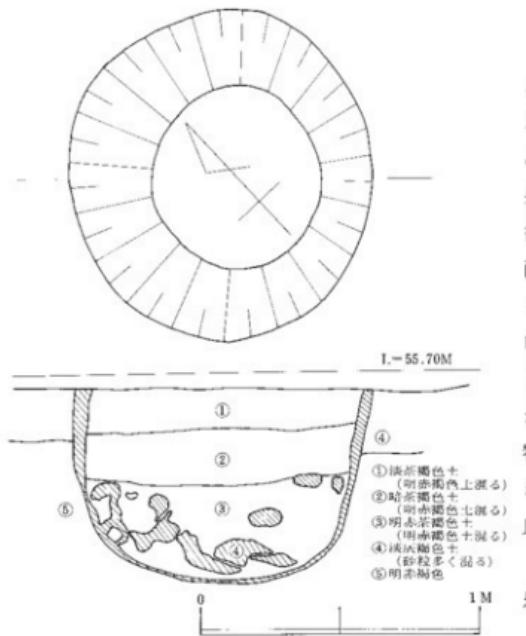
第63図 第1テラス井戸遺構図



第64図 第1テラス集石造構図

をめぐらし、小石積みにして、巾約50cm、長さ120cm、深さ50cmの空間を作っている。発見時は、その空間内に礫・土が堆積していた。遺物はなかった。

第1テラスの建物跡に付随する施設で、井戸に近いことを考えれば、ちょっとした手洗場的な施設であろう。同じような遺構が、字古寺の寺跡と思われる地と、妙見谷の奥の鐘撞にある。



第65図 第1テラス土塙遺構図

ある。石を立てて一列に並べたものである。S字形に少し蛇行しており、長さ4.4mにわたって続いている。この蛇行は、東側の石列が山側から押されて少し下方に下がったことによるものと思われる。石はいわゆる円護寺石である。

建物跡に伴う土留めのための石列であると考えられる。

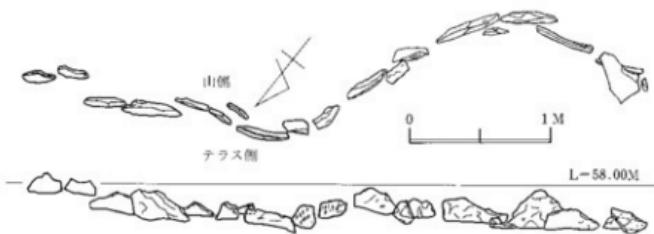
◎ 土塙

第1テラスの西の一段下がったテラス部分にトレンチを入れたところ、偶然半円形の落ち込みを検出し、平面的に広げた結果、半球状の土塙であった。直径110cm、深さ70cmを測る。断面を観察すると、土塙の底に沿って淡灰褐色の土が3~5cmの巾であり、どうもカルシウムらしい。埋土中にもそのような層が底のほうに部分的にある。建物廃棄時に埋めてしまったと思われる。遺物は、赤褐色の土器皿が1点ある。

建物跡に付随する便所の跡と思われる。

◎ 石列

第1テラスの南側は、崖状になっているが、その中に石列が



第66図 第1テラス石列遺構図

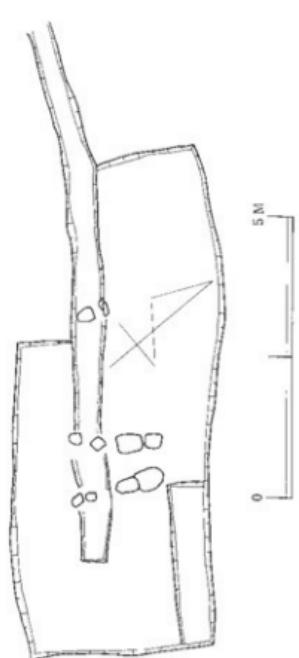
古屋敷第5テラス

第1テラス下方30mに、ややフラットな面があり、そこに大きな石が並んでいるのを見つめた。当初は露出した石棺蓋石ではないかと考えたが、周辺の表土をはぐと、石に二列に並んでいることがわかった。石列の間に素焼きの土器が入っていたことから、自然の石列とは考えがたく、何らかの理由で人為的に作られたものである。

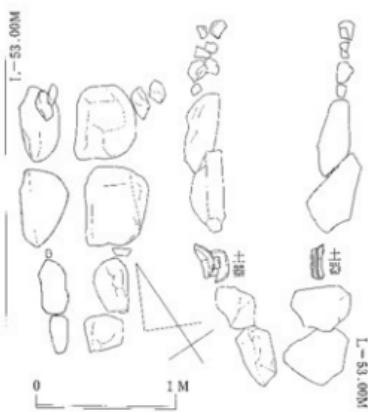
石列は北東—南西方向に1.8mほど並び、南側で少し開き気味になる。その方向は、第1テラスにほぼ平行し、北東から南西に向かってやや傾斜する地形にも沿っている。

遺物の土器は、破片が折り重なって出土し、復元の結果一個体分の底部となった。色は黄褐色でロクロを使っている。完形でなく用途はわからない。

位置から考えて第1テラスの建物跡に伴うものと考えられるが、その性格はわかっていない。



第67図 第5テラストレンチ図



第68図 第5テラス石列造構図



第69図 第5テラス遺物実測図

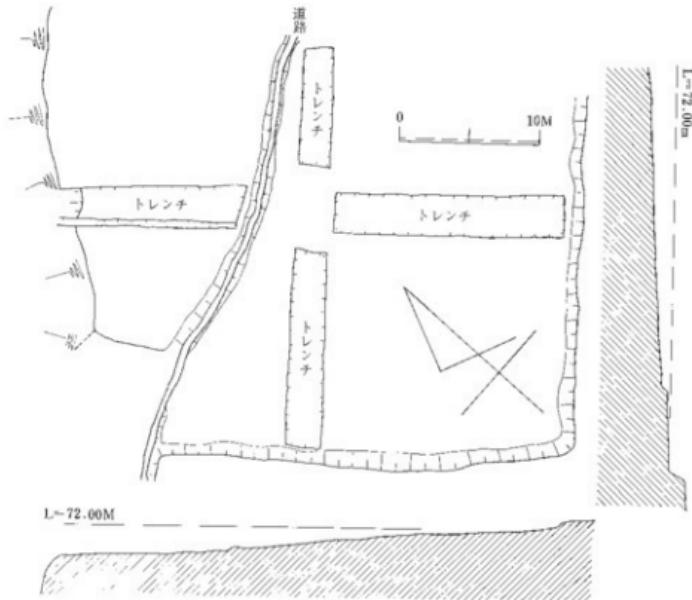
円護寺遺跡（散布地）

狭義の円護寺遺跡は、古層敷石跡の東方の字上ノ平ル妙見平にある、現在畠地となっているやや北側に傾斜する平坦面である。県遺跡地図に散布地として載っており、今回試掘トレンチを入れ、遺跡かどうかを確認した。

試掘トレンチは、地形に沿い、北西—南東方向に巾3mで2本、北東—南西方向に巾2.5mで2本、計140m²を十字になるように入れたが、いずれのトレンチでも、耕土を除去すると赤褐色の地山があらわれ、遺物は全くなかった。

この地の北西は、急な斜面となっており、南側は上ノ平ルの方向でゆるい傾斜で段々畠が続いている。下方には遺構は考えられないし、上方に遺構があったとすれば、下方であるこの地に多少の遺物の混入はみられるだろうから、この円護寺遺跡は、遺跡ではないと判断した。

しかし、古墳時代後期の古墳が周辺にあり、人間も周辺に住んでいたと思われるが、集落跡としての遺跡は周辺にみつかっておらず、円護寺遺跡が遺跡でなかったことによって、居住地と古墳の関係は今後の問題として残された。



第70図 円護寺遺跡トレンチ図

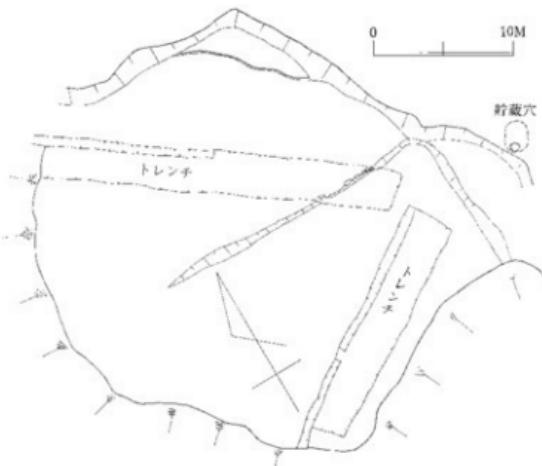
古寺地区

妙見池の北に、古寺という字名があり、「円護寺縁起」にも、この地が現在の円護寺以前の寺地だったことが記されている。中ノ郷団地建設計画地外ではあるが、古寺地内の山の中腹に、かなり広い平坦面があり、そこがもとの円護寺であったと思われる。そこから南東に階段状にテラスがつづき、妙見池まで連なるが、その最後のテラスが、中ノ郷団地建設地内に入るため、寺に関係する遺構が存在するかどうかトレンチを入れて調査した。

トレンチは地形に沿って、縦断方向と横断方向に巾3mで2本、計130m²を調査したが、遺物遺構とも発見できなかった。ただ東側すみに、貯蔵穴と思われる穴を発見したが、時期は不明である。この地はかつて畑となっており、耕作によって礎石等が破壊された可能性もあり、遺構がなかったとはいきれないだろう。

「縁起」によれば、元禄年間に、現在の場所に寺が移動したということであり、古寺の寺跡と思われる平坦面は、それよりきかのぼることになり中近世の円護寺を解明する上できわめて貴重である。

また、調査した場所のすぐ西の崖下で、須恵器片1点を採集した。現在、付近に古墳・遺跡は確認されていないが、古墳・遺跡の存在する可能性がある。



第71図 古寺地区トレンチ図